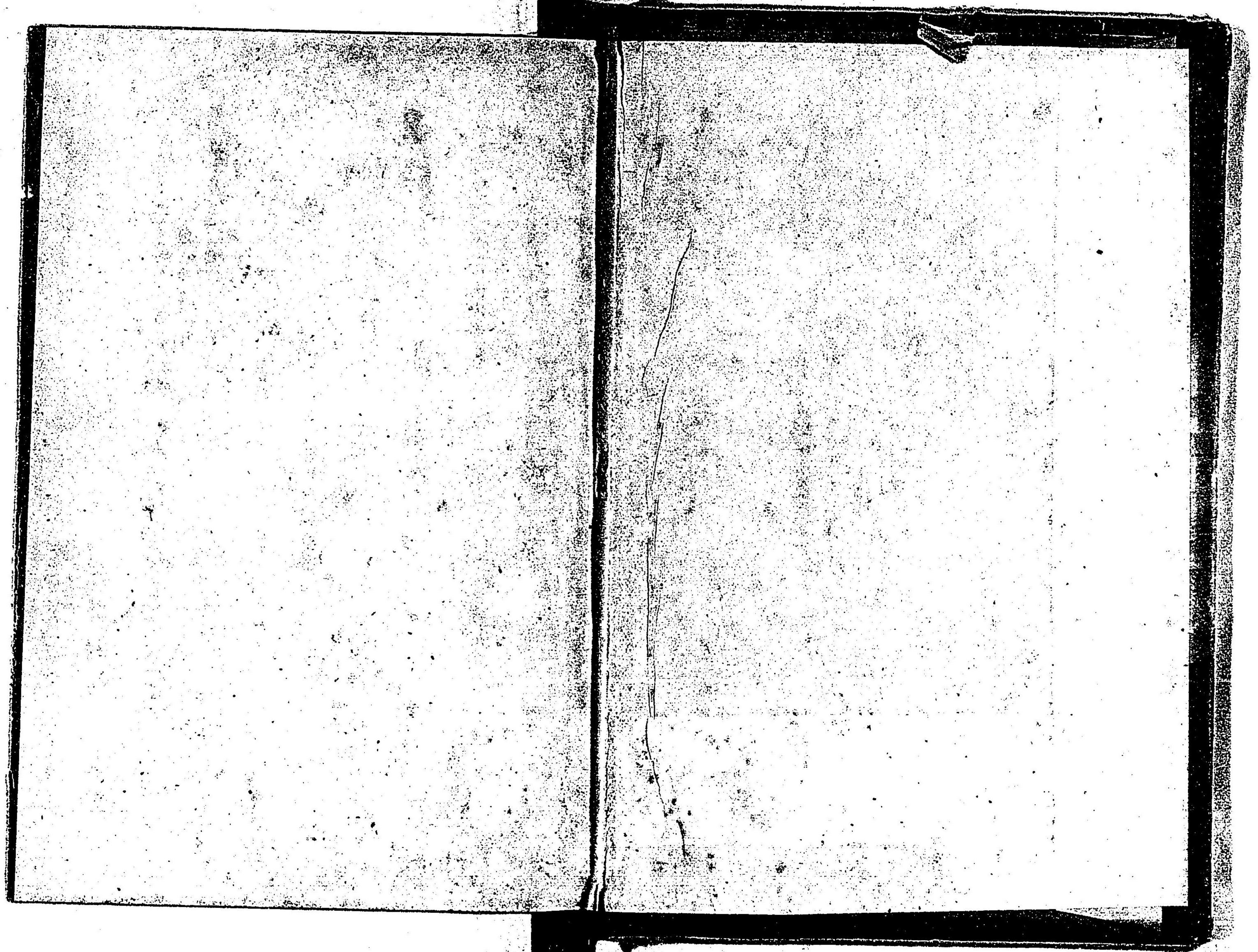


129  
1166

樽大鼓  
田高音







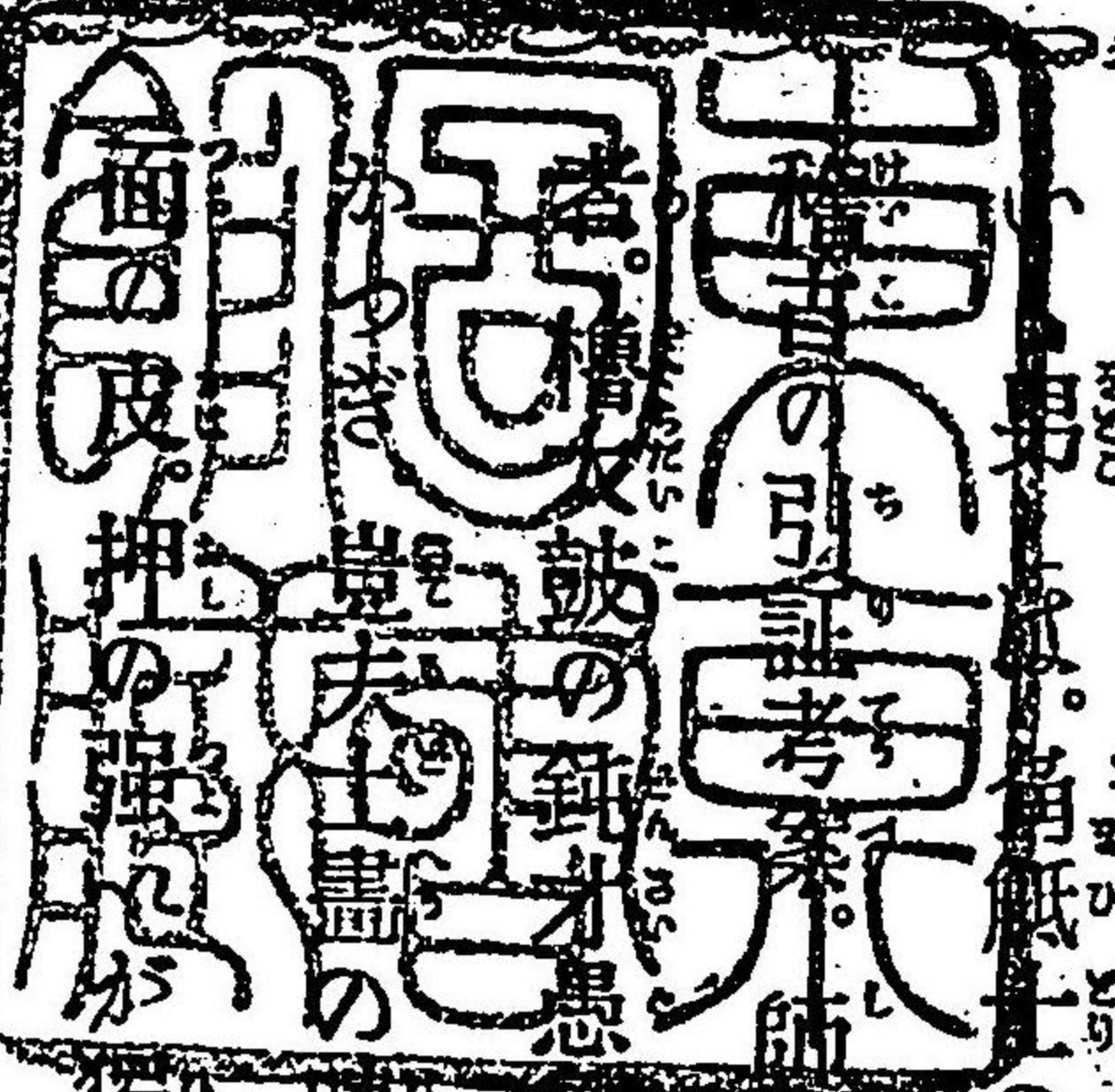


四十八手 櫓太鼓音高砂前編自序

勝を四本柱の中に決し。名を番附の上に掲げ。一年を暮す



朝夕

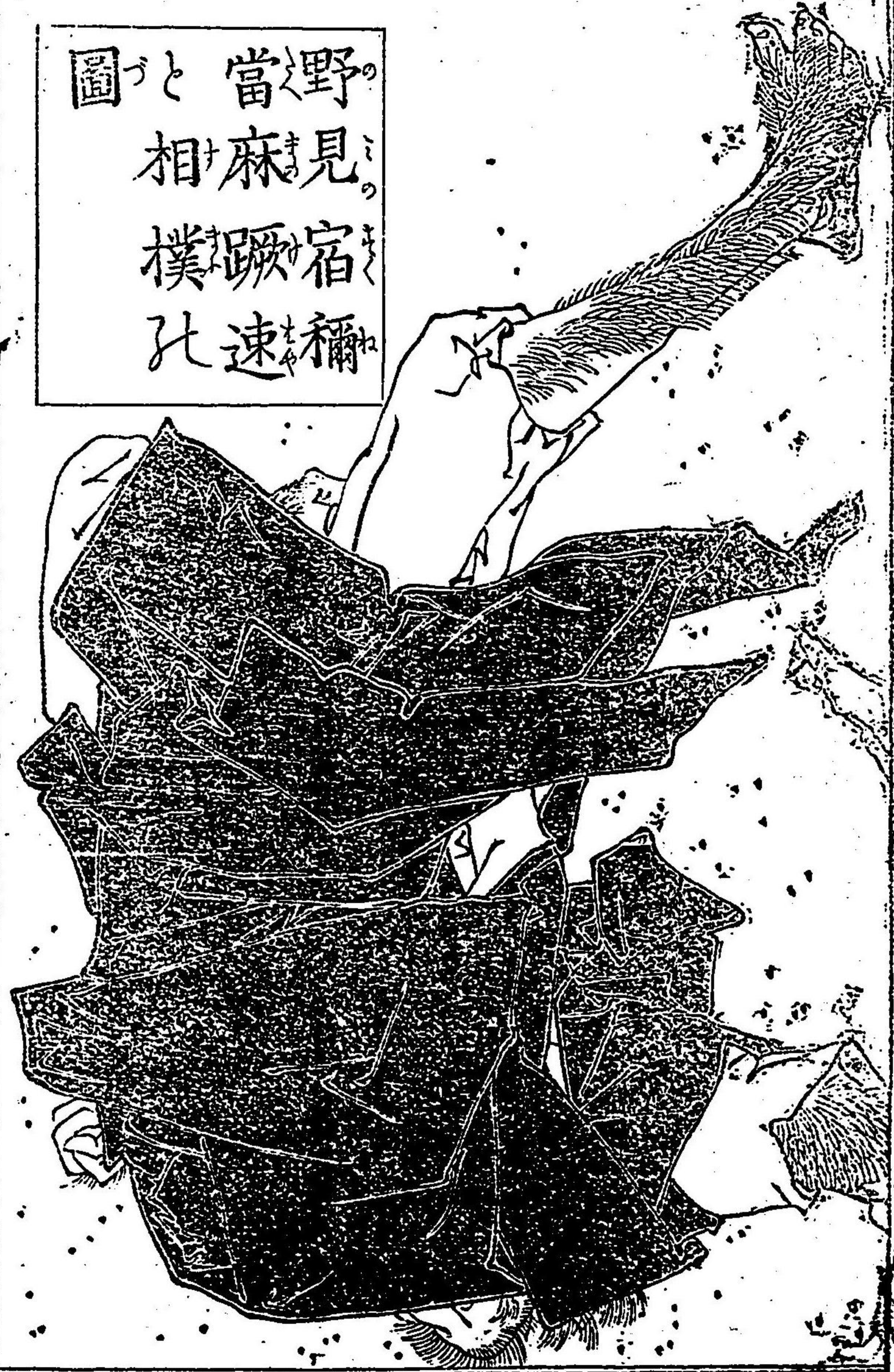


者。槽太鼓の鈍才愚營に。四十八手は闇にて。一文も不通ぬ犢鼻褌  
の皮押の強が。獨り自慢と。瘦た筆にも力瘤。發兌す矢筈に無  
鏡砲。あたると言ふは吉兆也。清めて茲に序と云爾

編者 孤蝶園幻夢戲題



野の當とつと圖  
見の麻相  
宿の蹶撲  
禰の速此









の直の遠祖長尾市とのつはして野見宿禰と召たまふ宿禰召に隨ふて都に登り大内に於て驟速と角觥とどらせ給ふ兩勇相對ふて立上りかのく脚と揚て闘み合ける程に宿禰の力や勝りけん驟速は脇骨と蹴折れ腰と踏挫がれて其首に仆て死したりければ見る人宿禰が怪力とぞ感じける 帝御感斜ならず當麻の驟速が所領と悉くく宿禰に下し賜ひしるば世是と腰折田と稱呼せり宿禰は 敵慮とのしこみて夫より都に停まりつ永く朝廷に仕へまつる是菅原家の先祖にして今尙相撲の祖と仰ぐ 茲にまた近頃頻りに流行する小童相撲の起原と尋ぬるに人皇五十六代清和天皇貞觀三年六月二十八日前殿に出御ましく小童相撲と敵覽有しこと三代實録に見えたり是とや始めと申せば其後盛んに行はれ人皇六十代 醍醐天皇の御宇延長六年閏七月六日中の六條院にて小童相撲二十番と 敵覽あり相撲はては式部卿親王の遊はされたり舞曲終りに船の吉實、散樂と供じ次に羅陵王、駒形といふと奏す、式部卿親王には纏頭ありける事古今著聞集に見えたり近世勸進になりても諸所に小供相撲のあることは其餘風とこそ知られたれ

第貳番

誠子拾遺に蔡伯階が子と誠むる文と載て曰く貴賤は常なし唯人の速く所なり苟くも善なる時は即ち庸夫の子も三公に至り不善なるときは三公の子も反つて凡庶と爲ると宜なるかな爰に上總の國山邊郡大豆谷村の豪農に山崎何某といへるあり世に不自由はあらざれと老て實の子なきと愛ひ神佛にさへ祈請と籠しか其心願の通じてや其後妻には懐妊して當る十月に産落せしは女の子なり素より獨り娘にあれば夫婦の喜悅一ト方ならず名とばおまさと呼せつ、蝶よ花よと育つる程に光陰は矢よりも早くおまさは既に蕾の花の綻るびかゝる年頃になりしかは或人の周旋にて同郡砂子村の農今井何某の長男金兵衛といへると婿養子となりしおまさ配偶たる後は夫婦の間も和諧く一家息災に消光しおまは間もなくおまさは懐胎して其臨月に出産せしは女の子(おまりよと云)なり恁而以後十年と過ぎ又もおまさは金兵衛が胤と宿し天保九年戊戌の十一月廿日安々と誕生せしは長男の伊之助とて即ち現今の高砂浦五郎なり斯て伊之助が三歳の折父金兵衛が實家なる砂子村に今井佐右衛門が養子となりたり(此佐右衛門といへるは伊之助の父金兵衛が弟にて伊之助の爲には則ち伯父に當れる人なり)さればまた山崎金兵衛は曩に父母とも亡ひたれば弘化元年の春長女おまりよお家潛と譲り同郡幸田村の農大木重兵衛の次男文五郎(三郎と云)と云ると養子に迎り都て身代と



打任せ金兵衛夫婦は小なる家と出来へ是へ移りて隠居なし家事には少しも係らず世と安樂に消光居たるの其定命にや金兵衛は其後幾春秋と送り迎へて嘉永五年子の秋に桐の一葉と散失たり是はこれ伊之助か十五歳の頃なりけり且説山崎家の養子文五郎は養父金兵衛の在り間は務めて農業とば勵みたりしが元來懶惰の性質なるより養父が此世と去し後は日々遊惰に身と持崩し田畑の事杯顧も見ず農家にありて農事とば忘れし如く手にだも觸す加之ならず養母おまさよと他人の如く取扱ひて少しも示教と守る事なく餘りの事と妻ありよが屢々泣いて諫むれど露程も容ざるのみ追々に品行と亂し家には名もなき破落戸や博奕奴と呼集ら日夜酒食に耽りしものから其消費は夥多しく遂に先祖代々傳はりたる田地は勿論家財諸道具迄と賣拂ひて他人の手に委するの形状見るに忍びぬ不品行と養母は深く打歎き密のに砂子村の今井許往きて細々伊之助に物語り兩の袂と絞りしと始めて聞て伊之助は一家の浮沈と打驚るさ情々肚裏におもふ様。今老母の言葉の如くは我と生たる父の家の滅亡必らず近きにあらん吾身は當時他の爲に養なはれては居るもの、此一大事と聞ながら唯等閑に棄置は泉下の亡父に分疏なし良々吾にも有意志的と義理ある兄へ諫の一書細々と書認ため老母へ托して歸し遣り猶其舉動と窺ふに文五郎は伊之助の書翰と得ても披もやらず朝夕博

徒の群に入て偶よ奇よの勝負にのみ心と移してあると聞き今は伊之助も堪り難ね一日養父へ事由と申して身の暇と賜りたれば急ぎ大豆谷村へ来て見るに昔日に變る爲体現在農家の檐にある農具は甚く錆朽て物の要にも足ざる有様。門戸は破ても修繕はず三徑は葎の生茂りて泪の露と置ばり家内の容子と窺がふに障子と洩て聞ゆるは壺皿の音勝負の聲に伊之助は潜然と唯落涙の外はなく胸も潰る、ばりなりし斯ては果じと伊之助は自ら心と鬼となし表の障子瓦刺離と引開け物とも言す多勢の博徒の輪と組て居る真中心へ身と躍らし踏込だり文五郎は夫と見て有繫心に恥たりけん突然納戸へ逃込しと追んとそれは博奕共おどろき乍らに支ぬるにぞ傍に有わふ用心棒もて容捨もあらず打据ゑられ那地此地に仆れ伏し皆且らくは起も得ず狐の如くしばく見のへり猫の如く脊と高くして腰と撫。頭首と摩すり漸々其場と逃去たり

第三番

居家必用と云る書に曰く少ふして勤勞せされは老て必らず艱辛す少ふして能く勞に服せは老て必らず安逸なりと善の言哉されは山崎文五郎は日夜懶惰に耽りし處へ突然伊之助に踏込れて有繫面目と失なひたるより納戸口より裏へ飛出し一時我家と立去りたり夫と覺り



て伊之助は老母と姉とと招き寄せ細々家事と相談し又其中に來るへしと其日は砂子村へ皈りし跡に文五郎は宅へ皈りて只願其身の前非と悔悟し謝書壹通と遣し置何處ともなく立去てその行方さへ知る者なありし是はこれ實に安政二年九月中旬の事にぞある有爾は山崎家の親類縁者は文五郎が失踪と聞て集議と遂げ第一跡目相続之義は故金兵衛の正統なる伊之助こそ順當なれと現時今井家の養子となり此方の自由にも成まじければ早々先方へ人遣し那と引取こそ良策ならめと聽て今井家へ掛合たるに佐右衛門も速やりに承諾なし伊之助が十八歳の冬實家の山崎へ復籍させ其後或人の媒妁にて同國武射郡成東村の農大橋銀右衛門の次女お瀧(そのとぎ)と呼迎へて目出度婚姻と取結びぬ是はこれ安政三年花の彌生の頃なりけり斯る次第に及びたるより伊之助は不憶なく父の名跡は受續ものゝ先代文五郎が年久しく荒し果たる遺業にあれば其困難は一ト方ならず非常の窮苦に陥りたれと爰ぞ一家の危急の秋と豫て豪膽なる伊之助は少しも屈する氣色と見せず朝は星と戴きて出で夕は月と負ふて歸る他も及ばぬ出精と村人は打見やりて賞賛さぬはなありしとぞ。茲に又伊之助は幼少より人に優れる膂力ありて角瓶の遊戯と甚く好めば折々諸所の宮相撲杯に立交り常に愉快の勝と得るもる自らも又興ある事と心と慰さめ好める道とて稼業の間には近村近郷の若

者原と打寄つ角力に神氣と散じ居る中益々伊之助は力量増て鄙角力の其中には誰一人として伊之助の右に出る者もなく自分ながらも歡喜の餘り角力の名と「磯千鳥」と人に呼せ諸所の土俵に勝負と闘めと決して角力に耽る事なく日々農事と勉強して家政と昔時に復さんと心に油断はあらずさけり。恁而一日の事なりしが伊之助は耕地まありて頻りに挿秧となし居たるに間近なる畔道へ五十歳ばかりの女乞食が十歳ばかりなる男の子と伴ひながら來りしが小兒の癖とて七八問母に後れて道と歩行或ひは地坦に撞乎と坐し少しも歩行の捗とらぬと乞食の母は見顧く厳しく叱言と言ながら引立れと肯ざるより竹杖揚て二つ三つ小兒の頭首と毆据ながらかのはれ是でも歩行すば百姓に遣て盡了と罵置るゑの不憶なく耳に入たる伊之助が勃然と起たる意氣慷慨是ぞろの身と起すべき金針とこそ後の日におもひ合せて潔きよき

第四番

古昔唐山秦の二世皇帝の時陽城と云處に陳勝と呼る人あり少き時より大いなる志望あり去ども其家貧くして常に耕作の日傭と稼ぎ他にのみ使役居たり一日例の如く傭夫等と共に耕地に働き居たりしが聽て陳勝は隴の上に休み多勢の傭夫等に云るには我志望と得て立



派な人に成しても必らず其方達と忘れはせぬト吐息ながらに述ると聞き多勢の甲乙は眼と  
 見合せて明と笑ひ貴様が天狗も古いもんだト口々に嘲弄され陳勝は嘆息し。何と胡笏な燕  
 雀等いので鴻鵠の志と知んと大風呂敷と擡げたが後終に秦國と亡ぼさんと義兵と擧げ陳王  
 ども楚王ども言れしは童子も承知の昔語り夫と是とは事變れど那の磯千鳥の伊之助は耕地  
 にありて圖らずも耳に入たる乞食の言葉「おのれ是でも歩行すば百姓に道て盡了」と聞ゆし  
 一言胆に銘じ獨り情々思ふ様此世の中の人と生れし賤しき者の數はあれど三度の食と他に  
 乞ひ寒暑に纏ふ衣服もなく朝夕住むべき家もあらぬ那乞食より賤しきはあらざるべし其乞  
 食にすら蔑視るゝ水呑百姓の淺ましさを朝より夕まで泥田と捏て蚯蚓や蝶蛙のみ伍とすなと  
 も奈何一生の樂あらん我も男兒と生れし甲斐に斷然鋤鋤の業と棄世に成出る方策となさで  
 は生涯卑賤に終るの外なし今の乞食が一言は我身の爲の千教万諭始めて夢の覺たる心地と  
 一心凝てに却々に猶豫なさる敏捷の伊之助其夜我家へ飯りて後其身と立るの思案と爲せ  
 と素より賤しき農民の亂世の時にありもせば那の中村の藤吉が萬々一の擧にも倣ふの手段  
 はあるべけれと四海は至て靜謐に上徳川の政令も未だ壞廢ぬ安政時代侯伯各自門閥ありて  
 卑賤と擧るの道もなく他に謀るべき術もあらねば豫て好める角力とめて一つには傾きこのゝ





りし山崎家と舊の如くに携直し又一つには業と勵みて日の下開山の美名と得ば今の番禰と脱して、錦と纏ふの期ならんやト勇氣勃々自のら禁せず懸て老母と姉ありよに思ふ仔細と物語れと婦人は心せまきものもゑ容易くは承引す彼是と期と延て其年(安政六未年の)夏も過ぎ秋も暮て冬の中となりけり茲に下總の國布川驛といへるに金刀比羅の神社あり例年の十月十日氏子の村々にて大祭と執行ふと恒となし當日同社の境内にて必らず相撲の興行あり今年も誰渠が勘進元にて江戸よりは幕の内の森と始め幕下三段目の相撲と買來り部角力との取組あるの結構もゑ近郷近在の若者等は腕と磨き精と養ひ初日の沙汰と待居たり然るに此相撲番附と製とるに付て一場の葛藤と起し愛憎偏頗の苦情の爲に一時は餘程の騒動となりしと布川驛にて有名の豪商三國屋某が仲裁に入り當時此地の博徒の親分上平の金藏などいへる顔役が双方と宥め漸やく其葛藤と解たる後上總下總の相撲と西の方となし江戸其外より來りし相撲と東の方と引分て番附と製へたり其時の大關は東の方、森にて西の方は上總山なり(上總での角力なりと)既に此相撲の初日となり二日三日と興行あれど流石大關は大關だけ一日も敗と取す數番の勝と得られしにぞ江戸方は破竹の勢ひ當るべくもあらずして上總下總の西方は甚く面目と失なひたり然ればまた今日の相撲は頃日日の出の評

判高き磯千鳥伊之助と禰との取組と前の日よりの顔觸に看客は片唾と飲土地最良の田舎堅氣情願磯千鳥に勝せたいと土間も機數も愈一同勝負如何と窺ひ居たる其精神の感じてや磯千鳥は不思議にも安々轟と倒したれば宛がら塙中は割るが如く暫時は鳴も止ざりけり斯る榮譽と得たりしより磯千鳥も歡喜に堪ず懸て興行果て後大豆谷村へ歸りしが此日角力の看客中に前年養子文五郎が我家にありて賭博とせん時同じ庭に集り居て甚く伊之助に惱められし破落戸も雜りとり圖らず伊之助と見たりしのば鑿の遺恨と惹出し那奴が此頃の鼻柱と一番挫いで呉んものと一夜四五人蹀し合せ大豆谷村の伊之助方へ不意に襲ひ入ると伊之助は驚きながら有合ふ火鉢取より早く破落戸等か面部と目覚げ發矢と投れば忽地に灰は四方へ飛散て黑白もわのぬ其なのより伊之助は飛で出手頃の棒と押取て再回家中へ躍り入當ると幸はひ難仆すに破落戸等は堪り得ず又もや今日も失措たのど逸足出して逃去たり

第五番

孝經に曰く身と立て道と行ひ名と後世に揚て以て父母と顯はす孝之終なりト却説磯千鳥伊之助は鑿に乞兒が罵りたる言葉は常に耳にありて立志の念慮止む時なく斯くて何日まで此村落にとらんより將軍職の御膝下へ一日も早く出府して我こゝろ投す角力の業と天地に祈



りて勉強なば日の下開山の榮譽と得て父母の名までと世に顯し錦とさうりて故郷に歸る期  
 ならざるやと自ら奮ひ一日其身の決心と誰に告んと尋思とすれど家には拒む婦女ばより他  
 に相談する人もなければ曩に其身の養はれし砂子村の伯父佐右衛門方に到り詳に志望の次  
 第と打明け出府の許容と乞たるに日頃俠氣ある佐右衛門なれば一議にも及ばずして是と承  
 引き留守の事より家内の始末何くれとなく懇ろに教へ諭して殊更に修業中の品行と誠め必  
 らず心と残さずして江戸に出なば勤め勵み立派になりて飯り來よと勇ましき訓賢に祝ひの  
 酒杯汲のはし袂と分ちてのへせしのは伊之助も歡喜しく再回老母や妻に對ひいよく決心  
 の趣と申し聞け是より江戸へ登りなば生死も知れぬ土儀の上投殺されて軀體のみ飯つて來  
 やうとス一られすいは、武士が戰場へ出向て往もみな事我本望の潔よく達せし上は御傳馬  
 の御袋鞍に跨つて下總上總常野の國々關八州は舊のな事四國九州中國までも此磯千鳥が  
 羽翹と伸し飛翔自在の身となるべし去ば目出度首途なり悦び呉よ歎く勿れと去年生れし幼  
 子(伊十郎)の虫が知らすの泣出す哀別離苦のなしみと眼前見る苦しみる愛着心に纏絆さ  
 れじと氣と取直して我家と立出で親類縁者知音の家にとまると告て鹿島立しは實に安政六  
 年十一月廿五日の早朝なりけり風蕭々として易水寒しと口吟みたる判轅ならねと住も馴

にし古郷に朝夕詠めあゝしたる四邊の樹梢山川も暫時にわれと別のどおもへば最を磯千鳥  
 翼も急に立のねて躊躇足に絆る飼犬心ありての尾と掉て前途と遠ざる別離の情實に死別れ  
 より生別れの哀しさは何に譬へん者もなきと有繫の伊之助氣と勵し江戸街道へと三里四里  
 足に任て急ぐ程に此日は朝より空打曇りて寒氣は肌膚と劈くばのり繼て未の下りより六花  
 さへ甚く降出たれば往來の人も稀なると思ひ凝たる伊之助なれば降來る雪と物ともせず打  
 拂ひくして辛くも其夜は下總の船橋まで辿り着き何某とか云る旅舎に宿り翌廿六日の黄昏  
 に始めて大都會の江戸へ着し豫てより心投したる阿武松の家と尋ぬるに深川御舟藏前大口  
 横町との事なれば馴ね町々聞續けて漸やう其首に尋ね往し上總よりとぞ案内しぬ阿武松は弟  
 子奴が取次來りて緯の由と大概聞てうち首領さ又しても新弟子の厄介者何は兎もわれ大雪  
 の道中に嘸のし草臥も爲つらん程に今宵は緩々那方に休憩せ明日の朝疾く面會せんとて其  
 夜は一ト間に臥しめて翌朝磯千鳥と奥へ招き詳く來由と問尋ね更に伊之助に對ひて云様「  
 如何にも汝が志望の程は一應殊勝に聞ゆれど抑々相撲の内幕は苦しく憂き物はなし第一  
 番附に登るまでは二年の場處と踏ねばならず前取、相中、本中、と番附下にも等級あり是と  
 首尾能取越ても漸やく位置は上の口其辛抱と爲やうより農業に出精しなば家内は無事に活



計されうと説と諭せと肯入ねばさらば弟子入なさせんと更に玉蓋と取交し名と東海大之助  
 と呼せけり爰に阿武松は式の如く弟子一同へ披露となし猶東海に示教る様「世に相撲四十  
 八手といへど是と正しく取分るは甚だ難し其古法に四の手あり頭と以てする」と反といひ、  
 手と以てすると捻りといひ、腰と以てすると投といひ、足と以てするると掛と云、然して此四  
 手より十二手宛と出し是と四十八手と名るなり則ち反にも數の手あり向ふ反、居反、掛反、  
 寄反、傳へ反、撞木反、一寸反、うさはし枕、腕反、鴨の入首、くじさ反、衣かつぎ、又(捻)にも  
 數の手あり合掌捻、肩そのし、外無双、内無双、突落し、逆捻り、くじさ、引おとし、出捻り、卷  
 落し、頭ひねり、片手わく、又(投)にも數の手あり上手投、下手投、引投、上矢倉、下矢倉、首投  
 からみ投、握り投、寄投、出投、手抜の腹投、八柄投、又(掛)にも數の手あり二足掛、一本掛、  
 内掛、外掛、手斧掛、泥障掛、呼掛渡掛、たぐり掛、のけもたれ、水掛、傳へ掛、此物稱に呼做せ  
 と素より其名は實の實、業は氣變のなと處臨機の進退一身禽狀其妙其味は言葉の上には容易  
 くは述盡されず是は退々に試て角力の奥儀と極められよと猶も古法古式と示し夫より我家  
 へ止宿おさ日々稽古と勵ませぬ

第六番

精神一到何事の成ざらん蟻のおもひも天までとやら偕も東海大之助は阿武松の弟子となり  
 日々師匠や兄弟子等に怠たらず稽古と頼み一心不乱に勵むにぞ阿武松も只願成じ往々歴々  
 の大力士に列する性と心の中常に恐れと懐きてとり。されば又大之助は角力社會の景状と  
 見るに各自初めは大關にも關脇、小結、横綱の榮譽と得んとて遙々の故郷と棄て江戸へ出師  
 匠ととりて一二年夏と冬と過す中或ひは辛い勤めに長ぢ又は博奕女郎買に其辛抱と半途  
 で挫き空しく故郷へ皈る時は股の横瘡と借金ばのり初めの志望も泥水の泡と消るの人多き  
 と熟々見聞て我身と誠め寔に修業の惡魔といふは女郎買と博奕なり既に博奕は我家と顛覆  
 すべき害ありしと目前に見し例もあれば自ら瀕る、恐れもなし去ば是より婦人と禁じ名  
 と成までは遊女場杯へ必らず一歩も踏入まじと神に誓とのけまくものしこき擁護と祈りて  
 居り、されば又安政の六年も暮れ翌萬延元年も早晩に過去りて文久元年の春と迎へ今年は  
 東海大之助が名と番附に顯さんと春場所の興行と待に待たる甲斐もなく此年正月の事なり  
 けん西九御殿炎上して公儀の混雜一ト方ならず寺社奉行所よりは角力年寄共に沙汰して力  
 士一同の他行と止め且春場所の興行も公儀への御遠慮とて延引せしめば一同の角力は幾つ  
 にも組と分ち或ひは神田、芝、淺草、と稽古相撲と興行す此時阿武松等は多勢の力士と一組



とし淺草觀音の境内に稽古相撲と興行するに日々の大入は宛がら湖の沸ごとく勝負と唯す  
 鯨波の聲は恰も山の崩るゝばかり最賑はしき景状なりし爰に一日の事なりしが其日の興  
 行も果て後角力共は徒然の餘り或は茶店揚弓場と素見歩行其中に本中の角力取貫藤吉と千  
 勝森何某は猿若町二丁目の芝居市村座の狂言と見物せんと連立て部屋より出で馬道の駁よ  
 り曲りて猿若町の二丁目へ出市村座の木戸に至るに素より角力は橋元とて芝居觀物其外の  
 興行まで見物料と出ざるが當時の習慣なれば何事もなく木戸と通り豫て設置の役棧敷(一  
 名角力棧敷と云)へ通らんとせしに誰やら先に此棧敷に入て見物せし人あるより貫と千勝  
 森は直ちに出方と招き寄せ何故ありて我等が棧敷へ見物と入たるぞ疾明渡せと雷罵と芝  
 居の出方は嘲笑ひ小角力取と蔑視て急に二個の言葉を用ひす何と小癩な頓鼻樞かつと惡  
 口せしと聞尤め氣早の二個は憤乎と焦燥立良々汝等今ぬのした一ト言と自がら覺えて居や  
 アがれと貶相して馳のへり所々に止宿の部屋くへ斯と荒増と報じ遣り後刻ともいはず是  
 より直二丁目の芝居小家と粉名微塵に打毀さんと獅子奮迅の猛勢に煽起られ何のは擬議せ  
 ん血氣に逸る力士ども此は面白しと事由とも質さず各自身輕の急仕度相中本中は申とに及  
 ばず上の口上二段三段目幕下の角力まで手拭もて糾鉢巻とし太き繩もて櫛に絞どり勢と

揃へて市村座の木戸前へ動と押寄木戸口に並居る出方と磔の如く投脱けて矢庭に土間や棧  
 敷へ踏どみ支へる奴等は此の通りと拳と揚て撃据く容捨もあらぬ狼籍に看客の老若男女  
 は夫と見るより騒ぎ立ッレ打こわしぞ疾通よと壯は老と扶け掖き老は小兒と矜はり連れ逃  
 んとすれど入口よりは追々角力の繰入て曳々聲に暴回れば常さへ狭き裏木戸の其混雜は一  
 ど方ならず或ひは壓れて倒るゝあり又は狼狽て怪我するあり今まで笑ひ樂しみたる愉快の  
 景状ひさのへて修羅の巷と忽地變玄悲鳴の聲は外に洩て叫喚地獄も斯はのり恐ろしなんど  
 云ばありなし去ばまた俳優ども、舞臺より逃去て各自鬢と脱間もなく衣裳のまゝに裏茶屋  
 杯へ隠れて容子と窺ひ居たり霎時ありて土間棧敷の看客は残らず逃去り跡には坐布團酒肴  
 の器具茶屋くの煙草盆のみ斯ては最早邪魔はなし卒家棟から奈落までかみひの儘に破毀  
 せと四五十人の若者原各自土間の桁引外し當ると幸ひ力に任せ縦横無盡に確立る其折しも  
 われ土間棧敷の諸所に仆れし南草盆の火は敷物や布團へ移り追々次第に廣がりて既に大事  
 に至らんず危ふき場合に至りしのも誰とて是と鎮める者なく唯此まゝに打棄置なば市村  
 座は申とに及ばず猿若町の三座は勿論數百の家屋は一朝に灰となるべき有様に裏表の茶屋  
 は更なり三座の座元出方まで安き心はなりのりけり忘る處へ遅れ走にはせ來りし一個の力士



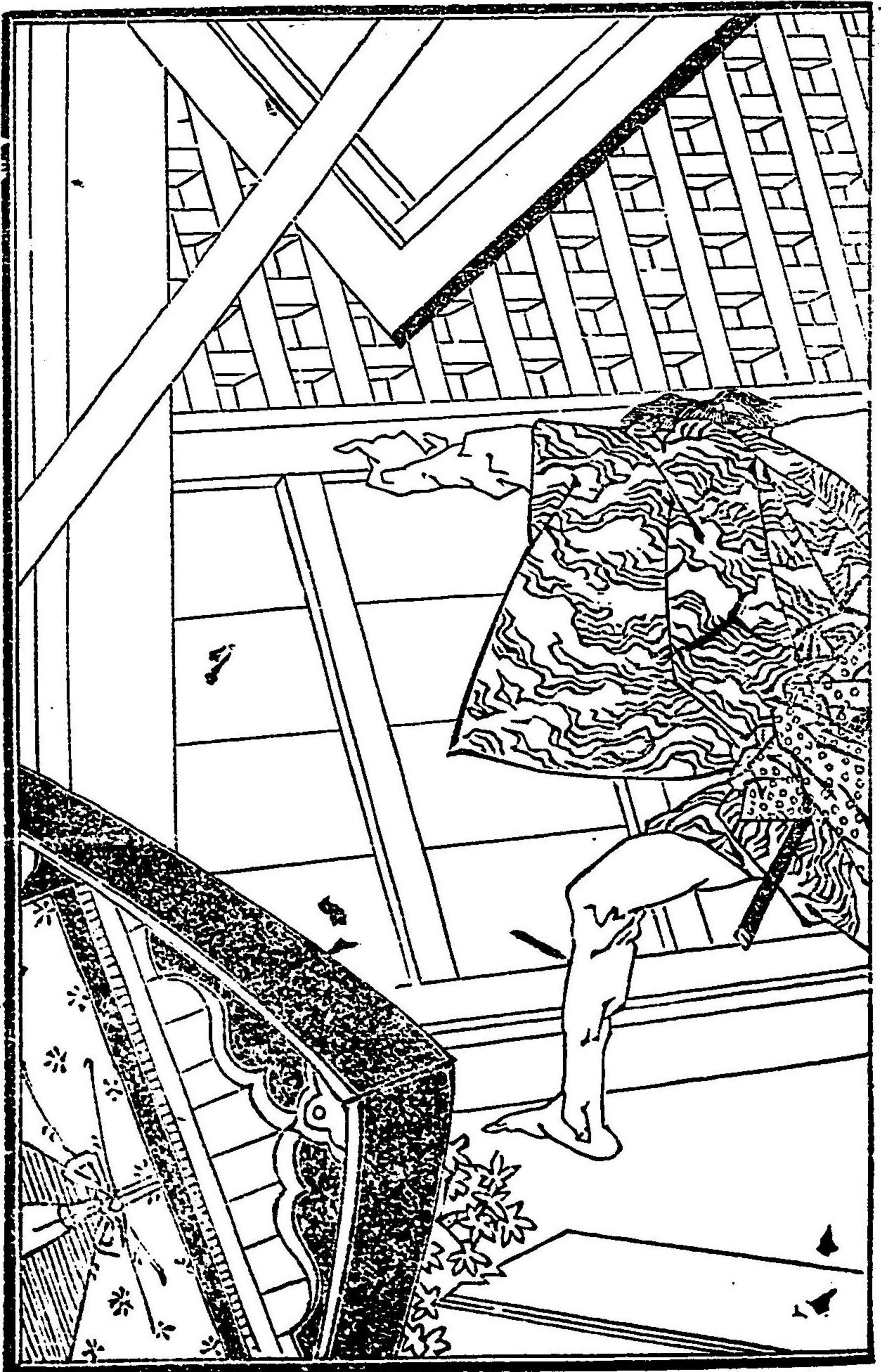
は是なん阿武松庄吉が門弟中にて頃日取手の名と得たる東海大之助なり此体と見て打驚き  
飯令市村座に怨恨ありとも外の芝居や茶屋小屋に怨恨のあらう筈はなし何は兎もあれ燃出  
した此火と早く鎮めずば事は大業に及びなん少しも猶豫の場合にあらすと他には構はで我  
一人芝居の前にある用水桶と引提げ烟の中へ投込く意外に出たる働らさせしと心ある人  
は見遣て竊のに舌と巻居たり

第七番

去程に此騒動は忽地四方へ傳播りて早くも相撲年寄の耳にも入れば开は等閑に棄置がたし  
疾々場處へ出張して詳しく出入の事由と質し此方に無理のない以上は立派に相撲の規模と  
正し必らずとも組合の瑕瑾にならぬ談判せよと當時の頭取より指揮に寄り心利たる年寄  
共急ぎ四五人出張し且見るに市村座の芝居の中は黒烟り立掩ひて踏入るべくもあらざる景  
状四下は老若うち集ひて其騒動と見物しされば四五人の年寄どもは霎時其首に躊躇居しが  
然とて隙限もあらざれば睚し合せて兪一同芝居の中へ急迫しく籠入り大聲揚て多勢の者と  
漸々に取鎮め兎もあれ淺草の地内まで引揚よと説諭の折柄爰に其頃江戸中に此者ありと知  
られたる一個の俠客新門の辰五郎は乾兒が報知に此騒動と聞込て見棄もされねば乾兒と違

れ自が住居に程遠のらねば猿若町二丁目へ赴きしが此時幸ひにして相撲年寄の出張せし際  
なりし故好機會なりと芝居へ立入り共に多勢と押宥め漸やうにして淺草寺の地内へ一同引  
取らんと暫時騒動も鎮まりけり茲に又東海大之助は燃立猛火と我獨り必死と消は止たれど  
も其中年寄共は出張して多勢と引て飯られしが後には座元其餘の者ども今日の亂暴と甚く  
怒り早々町役人には是と訴たへ相撲輩の不埒の所業と町奉行所へ申立んと相談中なる趣旨と  
竊のに聞て打驚ろき若も奉行所へ訴たへられなば忽地爰へ捕方の對ひとるは必然なり其時  
此方に人一人の應接なすべき者も居らねば假令十分の理分ありとも枉て非分に陥んも知れ  
ず好々我にも一ツの膽あり今若百萬の捕方が對ふとも死ともて敵する分別あらば何の恐る  
事あるべからずト大胆不敵の度胸と据ゑ芝居櫓の其上へ動乎と坐して大音揚げ「今日此  
芝居と破毀せし相撲組の發頭人は斯云東海大之助なり多勢の者は引取るとも我一人は爰に  
あり何なりとも持て來よ敵手にならんと云終り悠然として四下と睨まへ待構へたる形状は  
人もなげなる舉動なりさればまた二段目以下の相撲取等は思ふがまゝに怨恨と返し猶他足  
で働らき居たるに年寄どもと新門が仲裁に入ての説諭しに一同淺草寺地内へ引取頭立たる  
相撲より今日の始末の一任一什と新門に物語り市村座への談判と任せて以後は部屋くへ







各自罷りて其沙汰と油断もなさで待居たり然れば新門辰五郎は先相撲頭取に面會して仲裁の任と受け更に市村座の座元に逢て種々談判に及びたるより忽地に和談と遂げ双方無異議趣旨と通じいよく明日は改ためて和解の宴と開くべしと漸々事件も鎮定せり恁る場合に至りしるば市村座の出方共は櫓の上に前刻より東海大之助が控へ居ると座元へ夫と通せしにぞ座元も大いに驚きて早々新門へ通達し和談の趣意と説示して漸々東海と引取せ其翌日は此手打とて江戸中四十八組の齋頭は一同挨拶にと淺草地内へ出張し遣ひ物として相撲組へは酒樽と積重ね見舞として市村座へは大蒸籠の蕎麥と贈る其全盛は徳川の末世に驕りし人心ちると惜まぬ花も香も後世の名残となりけらし（因に云此時新門辰五郎と市村座の座元并びに相撲一同へ贈りたる蕎麥は猿若町三ヶ町より田町、馬道、花川戸、孰れの町も買盡して蕎麥屋は非常の利潤と得しと聞たるまゝに記し置のみ）去程に東海大之助は誰云となく市村座の芝居にありて非常の働らきとなしたりとて其評判も最高く殊に破竹の勢力あるもゑ知る人は是と知て大いに稱賛なし居たり爰に一日の事なるが吉原京町一丁目の鰻鱈店梅川の若い衆は一封の手翰と携さへ東海大之助と尋ね來り今し何處の御方なるの御來臨なさると此手紙と持て往けとの急のお使ひ直に返事と貰ひ度とかもひも寄ぬ事柄に東海は不

審と抱き何事なるのと封押ひらき見れば一筆のはしり書鳥渡御目に掛り度い問是非く此者と御同道吳々待上いと名當は我身に相違なければ迎ひに寄越せし其人の名と記さねば誰なるの少しの心向たりもなし去とて是と否もされねば其若い衆に誘引れ淺草寺より反畝と過ぎ彼不夜城裡へ入山形有繁は花のよし原丈左右の茶屋は萬燈に巷街と照して眼も眩く自づと氣も散り心も浮きて他羨やましき風情あるは都の人の常情なると獨り東海大之助は囊に婦人と禁せし一心堅く守て動さもやらず花の香さそふ梅川へ伴なはれてぞ入にける

第八番

金衣公子のしらべも深し竹の輿。借も東海大之助は招きに應じて梅川の二階に昇りて窺へば未だ見知らぬ一個の客人待詫し氣なるおもちして盃舉て居たりしと夫と見るより急に聲懸け上座と譲りて東海に就しめ先初對面の口籠も訖り更に玉盞と壽めて云やう。關取には今宵の迎ひと應ふし不思議と思はれなんが今關取と招きたるは我身變の日猿若町二丁目演劇見物に往つる時圖らず遣たる那騷動始めの程は吃驚せしが各自表の芝居茶屋にて見物なせし群に入り羨時詠め居たる折風と目に觸しは關取が他には少しも頓着せず燃立火中に踏込で能消止た非常のはたらき如何にも感服なしたるもゑ今日辱知の盃せん爲態



々此首へ迎へしなり寛々數献と傾けられよと賞美の語に東海も心の裡に深く喜悦び厚く謝言と陳たる後更に客人の姓名と問に再回對へて云るやう「我身は泉州岸和田在堀村の砂糖問屋岡村藤右衛門と云者なり幾つ年商賣上の大損毛より故郷と去て江戸へ出で今は此吉原の小店高田屋の若衆に住込み名とも伊助と呼替たり素より賤しき勤めとは覺悟の上の今の身の上さりとて何時まで他人の下に逐使はれてのみ居るべきぞ戀て花咲春にも逢ば世に香ばしく名乗も會なん失禮ながら關取にも後年ならす土俵の上に著るき名と四方に發し相撲の榮譽と揚んこと鏡にのけて見るが如し猶此後に要事あらば淺草田町二丁目の松葉屋と云引手茶屋あり是へ遊びに來られよと懇談數刻と過せし後其夜は分袂て歸りしが此伊助と唱ること現時根津須賀町に九匹五郎の娼樓と築き三千の遊女と養なふて萬客の嬉遊に備へ日夜の全盛新吉原の五大樓にもどさく劣らぬ花柳巷裡の阿房宮八幡樓と呼做す者なれば近年高砂浦五郎(曩の東海大之助)が數度の厄難に逢たるとも舊時の交誼と忘るゝ事なく任俠ともて是と助け大いに力と添えけるは實に得がたき男兒なり閑話休題彼の虎と雀拳に搏にし龍と双手に挫しぐ猛勇豪氣の大力士も生者必滅の無常は通れず爰に文久三年の秋九月當時相撲中に屈指の名ある三代目阿武松庄吉は二堅の爲に敗と取て果敢なく此世と

逝矣たるものうら門弟中は力と落して甚く悲歎に暮たるが斯て有べきに非されば厚く葬式の禮と擧げ以后に門弟中協議の上松ヶ枝喜三郎は師匠に就ての古顔と云殊に温和なる性質なればと豫て阿武松の言葉によりて松ヶ枝と千賀の浦と更めさせ相撲年寄と爲したる上先師の弟子と一同引受け確く取締となせしと云去ば東海大之助は夫より千賀の浦の世話になり益々稽古と怠たらねば其翌元治元年の春場所の上二段の相撲にまで出世と爲し此興行終りて後千賀の浦喜三郎等と共に東北地方へ稼業に出で諸所の興行に日と消り今越中の富山より加州金澤の市中へ乗込爰にて大相撲と催との筈なりしに此年六月廿三日長藩の國老福原越後等主君毛利侯父子の爲に進奏する處あらんと伏見藩邸に抵りし折柄脱藩の士四五百名が山崎の寶寺に屯集せしにぞ京師の騷擾大方ならず終に薩摩。土佐。久留米の三藩建議して之と討たんと請ふ長人等竊に其手配と謀ひ知て京師と襲ふ(大略)此時にありて金澤藩にも戒嚴あり四面の國境には關と構へて漫りに他國の人と入す又國中に寄留の甲乙は悉く取糺して聊かも不審あれば容赦もあらず搦め捕て獄に下ると取沙汰するより千賀の浦は打驚るき取ものも取敢ず其身の故郷越前の國三國港(現今は坂井港と云ふ)と遁れ去りしに餘の相撲等は周章狼狽各自當惑の眉と顰め必死と潜伏場と索ぬる中是も千賀の浦の門弟中



にて彌高山萬吉と云る者は幸ひ金澤在四十萬村の生れなるより東海大之助と袖ヶ浦留吉は彌高山に誘はれて同處に潜伏なしむたり然るに又長州生れの相撲取青海山何某と常陸生れの鹿島山の兩人は能登生れの貫藤吉(先に市村座破毀の騒動と引起したる發球人)と共に貫が故郷能登に潜れてゐたりしが青海山は長州人なるの嫌疑と以て金澤藩の爲に捕らられ又鹿島山は水戸浪士峰起の折なれば是も嫌疑と以て召捕れ兩人金澤へ護送れたりと親しく途上にて實見せし小野ヶ原(舊彌高山の師匠と云ふ)相撲年寄より遂然に彌高山の方へ急報せしにぞ東海等も甚く驚ろき斯ては爰に居るも危し去とて遁るゝ道もあらねど越前の國三國港には千賀の浦親方が居るべければ那方と投て落往んと兩個(東海と袖ヶ浦)は手早く用意と爲し挨拶倉皇彌高山が家と發足なしたりけり

第九番

斯而東海と袖ヶ浦は四十萬村と發足し本街道は危ければ間道よりと往方と定め平走りに走る程に生憎頃日の雨降つゝと捷徑は滑りて足と停めず又山間の溪川は出水の勢矢よりも激く其困難は一ト方ならず唯尋常の者なりせば進も得ざる危険の道路と血氣盛んの兩個の力士は曳々聲して難處と踏躑え漸くにして松戸川の渡口まで到り若しが此川もまた出水の

爲に川止となりぬたれば兩個は互ひに顔見合せ必至と當惑したれども去とて後へも引返されねば共に游泳て彼岸へ越んと決心なして赤裸となり衣服と帯にて引括り頭上へ乗せて潔よく逆巻流れへ飛入しが名に負ふ松戸の急流なれば兩個は見るゝ押流され既に危よく見えたりしが神の冥助か幸ひに四五丁の末流に至り兩個は辛くも前岸に流れ寄九死の中に一生と得たりしるは送みに再生の歡悅と言合て猶も歩行と急ぎし程に其黄昏の火ともし頃加州大聖寺の新關にさしゝれり素より急場の旅行にあれば東海も袖ヶ浦も豫て關所の切手と所持せず如何程事情と述ると雖も關所と預ゐる役人等は此頃の事變と聞て油断なければ肯も入す堅く通行と差止なれ愈々兩個は途方に暮進退維に谷まりしが最早此上は奇計と以て關と踰るの外なしと東海は袖ヶ浦と謀し合せ竊のに關所の裏手へ廻り關と借んと踏入しに其首には五十あまりなる小使様の老爺ありて兩個が難義の景狀と見聞に猜しむる容子に東海は胴巻より一朱銀二個と取出し密と老爺に袖の下内々委囑ば打はゝゑみて裏の戸口と押開き茲が則ち規則の間道役人の目にゝらぬ中疾々道と急がれよと指し示と情の下謝禮の言葉も忙はしく其間道より進みしが夜は暮果て黑白もわのす雨さへ頻りに降ろゝぎ殊に今朝より食事もせざれば飢渴くもあり身体疲勞て堪がたきは山々なる堪へ忍びし千辛萬



苦漸やくにして越前なる三國の港に到着し千賀の浦等に面會せし以后此處に安時逗留中變に諸方へ竊み居たりし此組合の相撲ども、追々に聞傳へて同處へ集會り世の餘節と待居る中豫て金澤藩へ召捕れし青海山と鹿島山も疑がひ晴て赦免になり是さへ三國へ來合せたれば千賀の浦も漸やうに安堵なし先づ第一番に同所にて興行せしが久しく途切てありたるものら人氣も立て景氣よく大入と取たるより續て福井武生の邊と滯はりなく興行し稍東國へ歸る道筋猶世の中は殺氣烈りて全たく平穩に至らねば先觸宿割の役々も唯尋常の相撲にては爲し難のららん千賀の浦は誰渠と撰む中圖らず東海大之助と見出したれば是こそ大丈夫の相撲なれと直ちに東海と先觸の役に充て信州路へと差のれり爾ば東海は毎日他の相撲より一日先に旅舎と發足一夜信州善光寺の旅人宿信濃屋と云るに止宿し時不圖相客に成たるは西山八兵衛とて生産は上總の人なるが當時北越地方の米搗人と周旋する業と營なみ居る趣きにて互ひに同國の人なれば忽地に惡意になり種々の雜話に夜と明して翌日も又兩人は信州追分まで同道し同驛の旅人宿油屋助左衛門方へ宿りしが其夜西山八兵衛は旅中の鬱と晴さん者と酒肴杯取寄て東海と共に盃と傾け稍心地よく酔たる時此家に豫て抱へある女郎と買て娛しまんと下婢に夫と命じやりしが如何なる事の間違なるの此家の若者等は紙

間の際にて何か頻りに八兵衛と罵しりあへると聞よりも八兵衛は棄措がたく早々若者と招き寄其事情と詰り問より茲に一場の騒動と惹起その趣むきは次の條と看て知るべし

第拾番

如何なる事由の間違ひなりしや頻りに油屋の若者等は西山八兵衛と嘲けり誹り聞に得堪ぬ其場の旨義に東海は不審と抱さ内々八兵衛に尋ねれど少しも彼等に関係せし事なき由と答ふるものら更に疑がひ解やらず其中娼妓の顔出しとて其場へ暫爾來りしが是さへ忽地坐と立て逃るが如く引退ぞき其後は絶て顔とも出さねば流石の八兵衛立腹し急に若い衆と打招き何故ありて前剋より我身と惡さまに嘲弄なすぞ何の仔細のある事ならん、あらば疾々茲にて述よと嚴しく談じ付られて其場は低頭平身し狐鼠く、陪話て逃去しが猶こりすまに諄々と此方の事と罵る様子に側聽する東海は堪り難ね猶番頭と其坐へ呼寄せ問を質せと眼昧に言葉と濁して埒明ねば去ば主人に面會して旅人の我等と輕蔑せし事由と是より札すべしと共に其坐と立上り興と目楚て東海、西山、慈々地に往んとすると道じと支ゆる若者等兩個と中に取圍みて拳と以て打擲するにぞ東海は勃然と怒り、汝等客人の我等に對ひ無禮と拵了上らるは最早容赦も成がたしサア此上は腕との談判敵手になるなら何匹でも頭首の針



の割ぬ様緒でも箆て出て来いと西山八兵衛と背後に掩ひ那方と睨んで身構へたる其騒動に奥の間より顯れ出たる此家の亭主仔細は何の分明ねと亂暴人と聞たるもゑ大盛揚て下知せる様、客は生若へ憤鼻揮のつぎナニ如何様の事が有らう寄て集つて怪我せぬやう致たゝきに爲て盡了と勢はひ込たる景狀に東海はせゝら笑ひ憤鼻揮のつぎが鉄の腕受けられるなら受て見よと恰も猛虎の群羊と驅るに等しき血氣の振舞當りがたくぞ見えたりけり然ればまた此騒動と聞付て多くの旅客は打驚ろさ上と下へと混雜すれば此事早くも村役人の耳に入り容易ならずと出張し那方此方と押宥め喧嘩の原因と釋ぬるにはは全く油屋の若者等が人違ひにて西山八兵衛と誹謗したる委細の事由判然せしめば主人助左衛門も盡に輕々敷下僕どもに指揮して東海等に抗敵たるゝ大きに悔ひ只願村役人に委屬て八兵衛と東海に詫入たるにぞ出入は忽地に鎮靜りて更に和解りの宴と開き多くの藝妓と打招きて互ひに隔意わらぬと示し踊りの舞の歡と盡して主客水魚の交誼と通じ又八兵衛と東海は茲にて兄弟の義と結び猶再會の期と約して翌日同驛と發足しぬ」恁而東海大之助は興行先の國々にて數度の艱難に遭たれども辛ふして是と通れ新師匠の千賀の浦と諸侶に滞はりなく江戸へ着しは元治元年の十月末なり去ばまた千賀の浦は今度加州にて東海が機轉の舉動千辛萬苦と事

どもせぬ豪氣の膽略あると見て遷つ年の市村座破毀し騒動の緯までも想ひ起し彼是と察するに後來渠奴は天晴なる大力士と成可ものど心中深く東海と愛慕ひ猶朝夕に厚く世話なし終に其身の前名なりし松ヶ枝と云と譲り一日大之助と打招き竊のに語り告る様、見らるゝ如く先師匠阿武松が死去せし後は我身が一同の弟子と引受取も直さず師匠の跡と相續なしては居るものゝ最早我身も年の上殊に子とては娘一人男ならねば此家と相續さざる譯にも往ねば思ひ込たる和主が伎倆未頼母敷其身体と我身に任せて此家と相續しては呉まいのと意外に出たる懇談に松ヶ枝は困じ果兎角の返答も急には出さず執れくど期と延せしが夫より後は千賀の浦が朝夕迫りて止ざれば爰に始めて肚裏と決め其身の素性出府の來歴故郷の事抔詳細に打明け其御深切は勿体なき迄難有けれと前の始末に及びし時實は妻なるかたきと云と表向は離縁なせども見まで舉げし夫婦の情此大之助が立身しなば昔時と忘れず再び迎へ舊の契約は變べからずと殘せし言葉と証となし其後聞はかたきには節操と守りて身と慎み他に委託て江戸へ出筋違内なる土井様の奥女中に奉公住此身の出世と待居るよし風の便りに聞て見れば義として之と去れませうと假令妻女と迎へずとも故郷に一人の老母あり是と養ふ兄弟なければ往々我身の望み足なば他百倍の孝養と爲んどおもふ心の本懐斯まで



切なき身の上なれば今更他家と相續し先祖の祀と絶のみならず老母や妻子へ誓詞と變るは如何も忍び難かる事情深くお察し下されと泪と共に物語ると熟々聞て千賀之浦は殊の外感歎しいよく松ヶ枝が義胆と賞して情あつく是と待遇養子の事はおもひと絶ちて其後娘と何家への縁と求めて嫁せしめたりとぞ

第十一 行

往昔すまひの勝負に争ひとなせし時木村何某といへる行司が、雪は折らん竹は折れじとつもる間に風吹はらふ志のゝめの空、といへる古歌と引もちひて左右となだめけるとかや寔に土俵の上にありては鬼神とも挫ぐべき猛勢と現はし却々に制しがたある形状には見ゆれども相撲取は世に優しく柔和なるものはあらざるべし茲に中古上覽相撲ありし時の土俵の古質と繹ねるに先四本柱の間三間四方柱より柱までの内土俵七俵づゝ合せて二十八俵と環すは天の二十八宿に象り東西南北の四本柱は須彌の四天と表せしなり丸土俵數十五と内に布は天の九星地の六極に比し東西に相合は陰陽和順の理に因なり去ば土俵の内と大極と云左右の入口と陰陽といひ仁義禮智信の五常と守りて法に適ふと式となすとぞ豈輕々しき事ならんや閑文字休説て那の松ヶ枝鶴之助は元治元年暮の場所にも至極の出来に出世な





し明れば慶應元年となり此春場所も花々敷取揚しと播州姫路の城主當時の御大老たりし酒井雅樂頭との、聞し召れ一日御家臣に仰せられて有名の相撲取と其邸中に招かせられ親しく取結びと御覽あり其時同家の御掛りは御奉行芝川佐内勘定奉行は古市藤之進、周旋方は綿貫淑三草刈庄五郎の四名にして當日召に寄て伺候せし相撲取は伊達ヶ關(後に相生、又綾瀬川)藤の戸、伊勢ヶ濱、高越山、東灘(後に手柄山)鹿島瀨、四方山(後に境川)北の浦、三村山、鯨の海、小柳、松ヶ枝後に(高見山)等にてお好に寄て數番の勝負あり終に其日お抱へに成たるは四方山(境川)伊達ヶ關(綾瀬川)松ヶ枝(高砂)東灘(手柄山)北の浦(兜山)の五名なりし去ば松ヶ枝鶴之助は姫路侯の御抱へとなり君侯より高見山大五郎と名と賜はり殊に時服等と拜領せしは大五郎の歡悦大方ならず厚く恩誼と謝し奉つりて愈々堅固に精神と籠め益々業と勵みし程に慶應元年の春場所も花々敷取上て其後姫路侯の上覽相撲とも果し市中一二ヶ所の興行終り其年の六月下旬千賀ノ浦の一組と共に常陸國府中驛へ興行に出んとせし其出立の前夜に當りて大騒動と惹起せし其原因と什麼と云に爰に高見山大五郎が愛顧の客に上總の國長柄郡茂原驛の豪商丸屋庄右衛門(通稱丸庄と云) いへる人あり性質相撲と甚く好めば此年の春場所より江戸に出て滞在し常に大五郎方へ出入なせば道回常陸

へ發足と聞き一夜大五郎と伴ふて一時なれども錢別にと新吉原仲之町の茶屋に遊び藝妓の間の大陽氣浮たゝの大盡騒ぎに其夜も更て九ツ過高見山は口と開いて餘りに時刻の運ならはぬ中去來御歸宿と促がすと肯ねと強て説とめお近いうちにと聞乘て大門より土堤へ踏出し徐々步行て往こそ宜れと駕籠にも駕で馬道へ差のゝりたる折こそわれ人殺しくと頻りに婦人の泣叫ぶは尋常の聲ならず頃日の物騒沙汰或ひは被剝の物盗か何にもせよ近寄て容子と見んと足早に進み往て窺へば年の紀二十二三の美貌婦人今しも四五人の浪人に手取足取り引据られ叫き號べと耳にも窺す婦人が帶と引解さつ猶衣服まで剝取て紅襪一重と成たる上是とば互ひに強姦せんと既に危ふき其体と見るに忍びぬ大五郎は環て素氣の性なるも急竊かに丸庄と片邊へ忍ばせ恐喝て那等と追散さんと大喝一聲顯れ出「汝等能も人と恐れず往來の人と惱ますよ十通りのおつた高見山が双の拳と受て見よと勢ひ込で威し被れば有繋無頼の惡漢原も一時は恟々ど打鷲さ均しく此方と見廻りつ各々身捕へなしたる間に捉へられたる其婦人は力に任せて身ともぎ離ち漸々其處は通れても身體と藏ふ衣服もなければ遠くへとては逃のられず半丁ばのり那方なる路次の裡へ潛み隠れ呼吸と殺してゐたりけり去ば又浪人原は衆と頼みの虚勢と張り各自刀の鯉口くつろげ寄ば斬んど教團ながら敵



手と見れば高見山の外に一人の影だに見えねば忽地眼と眼、口々に「ソレ田中氏横山氏渠奴は火伍もない容子邪魔ひろいだ今の返報息の根止ておやりなされチ、合點と抜連て斬て落ると見るよりも高見山は心の中渠奴等と茲にて闘ふは定に名もなき無法の喧嘩畢竟我身が此處に不圖求めて踏入しは婦人と救ひ出さん計り爾るに婦人は幸ひに危ふき虎口と遁れ去り我身の望み叶ひし上にハヤ此奴等に構ふは無益、とはいへ最初の勢ひに似ず此ま、茲と引退ぞかば渠奴等に卑怯と笑はれん如何なさんと尋思も待て白刃と振て斬付る傍若無人の舉動に高見山も禦ひ難ね四五歩後邊へ退ぞきたり

第拾二番

無頼不逞の浪士原遊たる婦人に目も眩す五人均しく高見山へ研て被れる遽然の場合に有聚豪氣の高見山も五六歩後へ引退ぞけば彼奴は愈々勢ひ猛く足と揃えて破亂くと突出したる長芒穂先は月に輝きて最も影もさ刃の中大五郎は家堂店と楯に取つゝ立掛たる技藝と急に引懸て退ぞきながら手頃に巻是と双手に振り回して縦横無盡に薙立つ替力に彼方の浪士原は忽地ハツと色めき立以前の虚勢何處へやら前なる一個の白刃さへ落されて逃出せば後なる輩も怯氣づき放屁腰の支へ立互ひに他のみ憑依として暫時は挑みむたりしが猶も手集

き舉動に又一人と薙仆され我と我身の白刃にて金瘡と負し景狀に早叶はヒとや思ひけん逃みに夫と眼配せして右往左往に逃散たれば高見山は吻と一と思猶も四方へ氣と配り油断あらざる背後より丸庄は立出來り高見山に聲と被け「關取最早大丈夫だいやまう實に危険事斯云處へ永居して如何な危難に遭ふも知れぬサア、疾く歸らうと促がし立てる處へ最前彼方へ逃隠れ怖々ながら此方の容子と窺ひむたる那の婦人は齒の根も合すわなくと戦慄ながらも浪人原の影の見えぬに少しく安堵し裸体の儘に立出て高見山と三拜し「何とぞ禮と申さうやら言葉に盡せぬ今宵の始末命の親の關取さま御恩は死ぬとも忘れませぬト兩手と合せて幾回か伏拜む婦人の顔高見山はすうし見て「爾云ふまへは柳橋の岡田の阿姐ぢやア有ませんのと聲被られて婦人も吃驚此方と親く打視やりて「松ヶ枝關（高見山の奮の名と呼たるなり）で有ましたのと再回驚く不思議の對面側聞せし丸庄も夫と見て「ろんなら今の難義に遭たは關取の懇意の御方の圖らず救ひ援はれたも互ひに幾ぬ御縁であらう何にいたせ和女さんに負傷のないのは勿怪の幸ひ夫にしても其体では如何する事も出來まいト囊に剥れし婦人の衣服と丸庄と高見山は那處此處尋ね回せども那浪人等が持逃しる更に見ねば強ては尋ねず丸庄は羽織と脱て是と婦人に引被させ兎もあれ今宵は兩個とも私の



旅宿へ来たが宜と伴ひ連て往折柄豫て丸庄が乗付の大傳馬町の赤岩(駕籠屋)の若衆は北里  
 へ嫖客と送った歸道空駕と釣ての通りの、りに丸庄は目早く呼止め聲の下から捲り紙婦人  
 と宿舎へ一ト肩委囑と云とも待ぬニツ返辭、辭退するとも肯ずして惣とる間疾く昇揚つ  
 榻町へと駛り往く」中古誰やらの附合に「厨房に麒麟の鮎の無ばあり」と云るへ「位牌  
 が口とさるば勘當」と附たりとの夫は一家の上とは見ゆれを延て國中騷者に耽りし徳川末  
 世の景状は回顧だに形なく暴客白晝に横行して市民は安さ心もなく公儀に賄賂ふこなはれ  
 て政治に依怙の沙汰と生せり寔に徳川の祖君たる家康公の聞し召ば前の附合の短句ならぬ  
 を御勘當もありぬべし有恁洗季の世の中なれば市中に無頼の惡漢潜みて常に良民の婦女と  
 盗み又財寶と掠むる杯枚擧に違わらざりけり去ば高見山と丸庄は路次にて救ひし婦人とは  
 赤岩の駕籠に駕せ橋町の旅舎へ送らせ後より兩個蹄り往て無事と祝ひの悦び酒宴互ひに酔  
 と盡して後有繫俠客の大盡客其夜の明ると待詫て婦人の衣服と整へ遣し夜前の始末と云舎  
 めて旅舎の男に送らせ遣りしは最も殊勝の話柄にこそ开も此婦人は兩國柳橋同朋町なる  
 岡田と呼る待合茶屋の親屬の者にて實家は淺草山谷堀にあり夜前も山谷堀の實家へ往て心  
 細くも唯獨り柳橋へ飯らんとて馬道まで來る、りに偶然邂逅し五人の浪士突然夫と見る

よりも立塞がつて道と通さず終に手籠にせらるゝ處と天の助けの幸ひにも高見山に救はれ  
 て其身は辛くも無事と得たるが岡田の家へは高見山が豫て最負の客と共に折々往たる其時  
 に見識同志の婦人の危難と圖らず助けし豪氣の舉動有し次第の一伍一什と婦人が飯宅での  
 物語りに岡田の主人は殆々感じ早々自から橋町なる丸庄が旅舎へ赴き厚く謝禮と述たる後  
 強て丸庄と高見山と其家へ招待し酒肴と呈して是と發應深く懇儀と結びし由有兩ばまた  
 高見山は夫等の事故に妨げられ新師匠の千賀ノ浦等と常陸へ發足の日限も一日後れとなり  
 たるにぞ其日の午刻頃丸庄に告別とつけ路次と急いで追菴往き府中驛にて其一組に行違ひ  
 たるにぞ同地の興行も景氣能打納め猶在郷諸所と興行して慶應元年の十二月滯はりなく江  
 戸へ歸着し目出度其年の冬と送り新たに慶應二年の春と迎へぬ然るに又姫路侯には去年高  
 見山と始め四名の力士とお抱へにはなりたれども未だ謁見と許されねば更に五名と御屋敷  
 へ召出され親しく君侯の謁見と許されし上各自御紋附の羽織其他品々の賜物あり殊に高見  
 山は未だ三段目の位置には居れぬ氣象活潑にして行爲凡常の者ならずと特別の例と以て此  
 日御傳馬と許可されしのは高見山は夢のどばあり深く恩義と謝し奉つり一同お屋敷と罷出  
 でしが爰に高見山は其身と省み前年故郷と立去る折此身幸ひ立身して御傳馬の鞍に跨り天



下の力士と呼ばれなば錦と飾りて其時こそ華々敷歸國せんと云遣したる言の葉の志望も今や  
屈きのけたり嘸や老母も親屬も我身の上と且暮に案じ過してゐらるゝならん幸ひ御傳馬も  
許可たれば久し振にて生れ故郷へ一回往きて來んものと右の次第と詳細のに千賀ノ浦に告  
聞え暫時の暇と乞受て江戸と發足道中筋は問屋へ掛りてお傳馬に乘替く最曠やのに着歸  
りて上總の國山邊郡大豆谷村へと赴ひさけり

第拾三番

却説高見山大五郎は江戸と發足とるに先だち飛脚に命じて實家なる老母が許へ飯郷の事と  
書認ためて通信せしに豫て且暮待詫し悴が歸郷と聞らに老母の歡悦一ト方ならずまた頑  
是なき孫(伊十郎)にまで父が歸りて來まするを溫柔くして譽られヨ若此事と母に聽さば嘸  
や歡悦とならんと子に惹さるゝ老母の愛情唯嬉しさと懐のしさに泪先立老の癖早々人と  
方へ馳て親類縁者へ其趣きと細々申し通せしにぞ夫ら夫へと傳説して今日は高見山が歸  
郷の日とて那の砂子村の伯父今井佐右衛門と始め親戚故舊は云に及ばず村内の若者等まで  
老母と共に東金驛の驛稍盡處まで迎ひに出今あゝと待程もなく高見山は御傳馬に跨りて  
意氣揚々と進み來ると此方の一同夫と見て「オ、關取の待詫しと聲と揃へて會釋するにぞ

高見山は遽然く馬より飛下跪づきて老母と拜し此年月待養と缺し不孝の罪と深く謝し酒健  
康にあると祝し其他親戚故舊の人へ一別以來の口説と述べ厚く其日の出迎いと謝したるに  
此一同も高見山が斯る出世の譽れと祝ひ打連立て大豆谷村の山崎家へを送り往きぬ去ば又  
高見山は其翌日我家に於て盛んなる祝宴と張り近隣知人は云も更なり親類其他村内の人々  
と招待し厚く饗應志たりしのは狭き僻陬の常として忽地四方に評判傳はり田舎相撲の甲乙  
まで高見山に面會せんとて大豆谷村の家と訪もの甚なからずと聞ゆたり嗚呼一介の農夫、  
乞食が半句の奇言に感じ一朝志念と立たるより未だ數年ならずして漸く宿昔の願望と達し  
寔に昔日の磯千鳥にあらず此時にして陳勝に聞しめなば却つて大五郎に一步と譲らん努め  
たりと謂つべし閑話休是高見山は今日の歸國と幸ひに是非村内にて一ト相撲と興行せんと  
の思慮あれば先世話方其外の手配と定め急ぎ飛脚と江戸へ馳らせ千賀ノ浦方へ照會て力士  
數名と招き寄するの約束と結び萬事の都合整ひしるば早々興行場の普請に掛り用意概略届  
しき頃江戸相撲も前約通り乘込來りいよく明日は初日と出さんと觸太鼓と回せしに此音  
と聞て興行と妨害なせし人こそあれ开は何者ぞと釋ぬるに東金驛にて當時は飛禽さへも落  
せしと云關八州取締御代官より命せられし三十五ヶ村の大惣代其名と大多和平左衛門と呼



者なり今高見山が相撲の興行と爲すに付て唯一言の届けもなく世に云ツ。ツ。の付さうしと  
甚く怒り直ちに一書と認ためて那の惣代の威權と震ひ使丁に爲持て大豆谷村の興行場へ追  
遣ければ使丁は直ちに同處へ至り虎の威と仮る權柄頼御用と楯の他嚇しに皆一同は何事の  
と恐れおのゝき右往左往急に高見山と呼招き惣代よりの書翰と渡せば高見山は不審に堪ず  
取手も疾く披き見れば文意無届にての興行は不相成との故障より爰に一場の爲藤と惹起す  
其事情は次の條に説分べし

第十四番

翌日は初日と興行場の四方に積し飾り物最負相撲へ進上の數と盡せし上景氣に勇み立たる  
若者等農業とさへに僉休みて高見山が家と始め場所へ多勢は寄集まり各自相撲の評杯口々  
になし居る處へ今しも東金驛の大惣代大多和平左衛門より故障と入しと聞て一同色と失な  
び折角關取の丹精も此まゝ土俵と崩しなば遙々故郷へ歸られた花も嵐の亂離骨灰借残念な  
事ではあると一人が云ば五七人虚と傳へ行く田舎道狭い土地とて忽地に此事四方へ傳播て  
今度江戸より下りたる關取をもまで打驚ろさ如何に落着なすことと眉と縋めて居たりけ  
り然ばまた高見山は熟々と大和多が書狀と讀み使丁の者に云るやう、仰せの趣き勲進元な

る高見山大五郎確のに承知致したり早々興行場も取崩しお差圖通りに爲すべけれど畢竟此  
方も一ツの商業妨害られて阿容く〜と唯此まゝには打棄がたし因て是より其事理と大惣代  
へ質問せん爲唯今跡より罷り出ん其趣きと疾飯りて平左どのへ申されよト怒氣と含みて言  
放ち使丁と歸して忽地に其身は美麗の衣服と纏ひ一刀腰に横たへて供とも進ず唯獨り魚鱗  
胸に疝癢の 皆尖く釣上て支ゆる人の言葉も用ひず裝引撥げて一目散東金驛へと急ぎ行く  
去程に大多和平左衛門方にては最前使丁の歸り來て角々云々との返辭と聞き、平左衛門は  
勃然と怒り汝悪くさ暴言と吐ものな今にも此方へ出來らば大惣代の威權と以て生胆挫い  
で呉んものと待構へ居る其の折のら高見山は歩と早めて大多和方へ趣きつ案内と乞へば取  
次の男は一ト間へ誘なふにぞ此首に暫時扣へ居る時しも紙門と左右に開き傲然として立出  
たるは則ち大多和平左衛門にて徐々と上座に着き高見山と後目にけ懸て那より訊ぬる  
やう「此度大豆谷村に於て相撲興行の趣きなるが何故大惣代なる拙者方へ一言の届けもな  
く觸太鼓と廻せしぞ仔細あらば語るべし疾々聞んと詰寄ると高見山は聞訖り靜のに答へて  
云るやう「仰せの如く大豆谷村にて此度江戸相撲の興行と開きしは我等勲進元の當人なる  
が何故ありて其興行の届と此方へ爲とべき譯の一向是迄に例規も聞ず夫等の次第も辨まへ



ねば何卒其意と示教されたしと半分聞ず威丈高「何故とは片腹痛し拙者ど何者ど心得めさる辱けなくも關八州御取締より命せられし三十五ヶ村の大惣代なり假初にも我惣代の村内に大小の事故ある時は一々届け出る事問でも知れた作法なり去と何ぞや兎や角と抗抵立る無敵の舉動猶も四の五の申さんには誰人として用捨はせぬト聲と放つて宣示せば高見山は莞爾と笑み「有爾御作法は聞及ばねと我身は當時の大老職たる酒井雅樂頭の家臣も同じき御抱への力士なり上より日本六十餘州自由に興行と免されし江戸相撲の一人なれば何處什麼なる國にても我等が興行と差止べき所以は決して有まじと我のら許せし權の太鼓達て連行とお止めあらば我等逆も此まゝに用捨なすべき場合にあらず早々江戸表へ罷り歸り公儀へ此旨申し出で貴殿と黑白と争ひ申さん屹度お忘れなさるなト袖打揮ふて高見山が一ト問と出る折こそあれ那方の障子颯と押開け關取暫く〜と急ぎ其場へ出たる者あり

第拾五番

呼止られて高見山は思はず後邊と振顧れば是はこれ豫て而識たる東金驛にて有名の俠客本街の勘三逆義と見て勇む氣發の男頻りに高見山と押寄めて何は兎もあれ此出入と我身に任せ異よと言にぞ退が否とも言葉て然ば委任る其手續と詳しく語り聞さんとして會釋もなき

で大多和の家と兩個は立出つ同驛にて有名る割烹店金泉樓へ押登り茲にて始終の談話と爲すに勘三もまた疾く領承み日頃出入の大多和家那方に取置が有ても濟ねば双方得心する様に信度裁判して見せうと酒さへ碌々飲もやらず勿々平左衛門方へ戻り那の高見山が生立より江戸へ出ての出世の來歴今度姫路侯のお抱へとなり今の名とさへ賜りしまで悉く〜物語りされは那の無届の所行も不埒の様には聞ゆれと畢竟此方も相撲にまてお世話なさらととももの事また此上に騒ぎ立なは不慮の事件と惹出さんも圖り難ある渠等の權幕唯此まゝに許容あらは双方花の香と散さす互に無事の實と結ひて土地も賑ふ相撲のこう行渠等の榮譽も高見山其他の力士も安堵すへしと頻りに説れて點頭大多和心意に感せし處やありけん如何にも貴公に委任へければよしなに仲裁たのみ入ると弱き言葉と聞くよりも勘三は左もこそト再回金泉樓へ急ぎ往き高見山に斯と告て此處に双方と和談させ漸々笑ひと催す際柄義に當驛へ乗込たる江戸相撲の呼出如何某は狼狽周章金泉樓へ馳來り高見山關に達してと事故わりげなる顔色に女中どもは打駭るき斯と高見山へ報告も待て突然二階へ飛上り高見山と見るよりも「關取大變てふりまど前刻誰やらの來ての話に今度大豆谷村のこう行も此驛の大惣代の邪魔するのみの關取と擒獲にして村へ飯さぬとの噂と聞き氣の逸い關取業は實



否も糺さず勃然と怒り己れ悪くい疫病神奴江戸から下つた力士等の稼業と止るの難のどぬ  
 のそ其舌の根と引抜て船にして食ふた上高見山と取戻し信度明日は初日にそると今しも大  
 多和どやらの家へ押出して行く容子私は前刻に開取と此家てお見のけ申した故急いでお報  
 道に参りましたと云と等しく高見山は勘三に會釋して其座の藝妓の取出す脇差腰に投方の  
 江戸相撲等の旅舎へと馳行き既に闕と跨き出んと騒動なすと押鎖め前の次第と明細に語り  
 聞して翌日花々敷こう行せしに乃日珍らしき顔觸もる遠近の老若男女群となして入來り  
 加之ならず最負の客より贈られし幟の數は風に靡て景氣能終に興行終るに至りて高見山は  
 金七百圓餘の利益と得たりと寔に愉快の一話にこそ

第拾六番

著松移し植る東江城、三百年來晩翠清、と吟誦されたる徳川の政令茲に衰へて天下は麻の如  
 く亂れ兇漢惡徒は晝夜と分たず漫りに市街と横行して豪商富家に害と及ぼす濁世澆季の  
 時にあれば人心一日も穩やのならざる慶應二年の春二月高見山大五郎は故郷上總の興行も  
 滞りなく打上て他の江戸相撲と共に歸府せし後此年の春相撲も萬事首尾克く濟せしるは  
 親方分なる千賀ノ浦方へ弟子一同は寄宿て居り然るに千賀ノ浦は諸事の都合と圖り從來の

深川御舟藏前大口横町の住宅より兩國米澤町の新道へ移轉り愈此處に住居たり忽て世の中  
 は月々に騒々敷成もきて諸國の無賴浪士は多く江戸に入込來り貨財と掠め喧嘩と張り殺傷  
 街衢に聲と絶ねば良賤安き心もなしのゝる不穩の有様なれば千賀の浦も弟子等と謀し合せ  
 嚴しく要慎なし居たるに一日の點燈頃なりとの兩個の浪士は米澤町なる千賀ノ浦の宅に來  
 り折しも閉せし門の外より左も横柄なる聲と上げ開よくと怒鳴と聞き竊のには是と窺へば  
 黒紋付の古小袖に無反の長刀落し差兄たり難く弟たり難き共に兇惡の面頬音訪來りし此者  
 等は此頃流行押借ならんと早くも猜せば千賀ノ浦は態と家裡より聲と被け恐被て渠奴等と  
 退却ぞけんども門外なるは何者ぞ此家の主人と知らざる賊辱しけなくも越前福井の城主松  
 平越前守のお抱へ相撲千賀ノ浦が住宅なり何用ありて亂暴に我門口と打敲くと仔細と申  
 せト罵示せど浪士原は少しも恐れず冷笑ひつゝ答ふる様「たとへ越前侯の抱へなる千賀ノ  
 浦が宅なりとも何の用捨あるべきぞ我等は天下の浪士なり其千賀ノ浦に面會して申し談ず  
 る仔細あれば態々御足勞遊ばしたのた難有いと九拜して早く門と開らば宜若も四ノ五ノ躊  
 躇ば目に物見せぬぞ覺悟せよト大喝一聲一人が腰の刀と閃々と引抜き板塀四五太刀斬付る  
 其猛勢に驚き恐れ千賀ノ浦は這々の体と爲し周章て二階へ駈登り八九人の弟子共へ急迫く



是と報知しにぞ逸りきつたる若者輩此事と聞と等しく汝悪くい素浪人やはの恩の根止て呉んと各自手にく得物と携へ又は二階の窓より登りて家根の瓦と引きめくり力士と目覷て擲げのけんどふさく用意と爲したりけり然るにまた浪士原は門外に此物音と聞付しの刀と鞘に投方の何處ともなく立去たり有爾程に千賀ノ浦は賊去て門と閉づの古竈と守らず彼の浪士原が門外と立去たるに心傲り猶且血氣の力士等が逸り立たる擬勢に乗じ兇の者に指揮して言やう今の浪士が雜言過言譎怪至極の振舞なり加之す我門戸と亂暴に所付しは傍若無人の悪くき奴原各自用意せしこそ幸ひ遠くは往まい跡追覓て虎狼に比しき惡徒と仆し世の禍根と除くべし卒とて其身も精悍しく仕度なし勢ひ込で立出んとしたる時最前より二階の隅に腕又ぬきて默然と動きもやらでつい居たる高見山大五郎は此有様と見るよりも慌忙走り出師匠の袖と引停め「師匠は何處へ往る、ぞ心得がたき此騒動如何にも唯今の浪士が舉動言語に絶たる亂暴なれどもいはば渠等は世の長物關係ぬが此方の利徳幸ひに門闕のぬもぬ歸り往しは勿怪の僥倖唯此まゝに打棄置とて何の此方に障碍のあらん愁じひ彼等と追往ば却つて禍ひと買もおなじく良や浪士と變したりとも此方に傷と受もしなば世に云毛と吹て疵と求むるの譬に近く誠に馬鹿くしき限りなりト半分聞ぬ千賀ノ浦は兇雨と打

笑ひ「汝は平素度胸よき廣言と吐散せと今日と成ての其卑怯は言行相違なすに非ずや汝一人浪士が怖くば同道せざるも妨げなし卒兇の者來られよと袖振棄て馳出し浪士の跡と逐往しに折しも巖の兩個の者と藥研堀にて礮と邂逅ひ眼み合間もあらばこそ千賀ノ浦が指揮の下若者等は得物と打振り浪士と真中に押取圍み物とも言で撃てのゝると浪士等は見て勃然と怒り「汝等は何等の狼籍ぞ意趣の遺恨の物盗か天下の浪士と知らざるや覺悟とせよトの言葉の下腰に帯たる一刀と閃々と抜て身構へなし寄は斬んと睨まへたり衆と頼みの若者共何と胡笏な素浪人おた口ぬのさす往生せよト滅多無法に棒打振り始めは屈せぬ勢力なりしか流石の太刀風に斬立られ千賀ノ浦と始めとして多勢の弟子も逡巡して兇道仕度の氣味あると得たりと着入る兩個の浪士互ひに一刀打ふりく前後左右に追回と折しもあれ此處へ高見山大五郎は最前師匠と諫めしが用ひられぬと遺憾におもひ獨り留守居はなし居たれど去とて師匠の身の上の氣遣はしさに堪やらねば思はず師匠の家と立出で米澤町の四ツ辻まで辿り出たる鼻頭に晃めく刀の電光偕はど心愕然たり

第拾七番

時しも日暮て間もなければ往來の老若男女はソレ喧嘩よト立喋り動搖めさ渡りて混雜と中







にも胆太き彌次馬連は人の軒端に遠くイすみ此争闘と見物すれと緯の仔細と詳らに知ねば  
 十人寄と十種の評言「モシ和主大變な喧嘩てムリ升か何の遺恨でもムリ升のな」されは  
 サ私も詳しくは知りませんが一方は相撲年寄の千賀ノ浦親方の弟子等て敵手は九州浪人だ  
 さうですの何でも容子と見るに那の浪人の一人の故郷に居る時高見山大五郎の父親と殺し  
 たとやらて夫のら高見山は小兒ながらも口惜くおもひ親の敵が討たいト十二の時に故郷に  
 出て先年故人になられた阿武松庄吉親方の處へ憑據相撲に成た其後も諸所の興行場て敵の  
 奴と尋ねたが遂にめぐり逢なつたと今日はのらすも其敵に邂逅した處のら名乗合の敵討  
 情願首尾克く敵の奴と負させて遣たいものです「は、ア左様てムリまその爾して其高見山  
 と云關取は何國の人てムい升チ「その高見山のエその高見山は肥後の熊本の出産て加藤虎  
 右衛門と云鍛冶職の息子だと云事ですト半分云せず又一人が「失禮ながら和主には何にも  
 御存じないと見ゆ升アノ阿武松の家の高見山と云たら當時賣出の流行相撲娘路のお抱  
 へに成て何でもすばらしい今の勢力今夜の喧嘩の譯は聞ぬが其高見山なら生産は上總の東  
 金在だト借のに聞て居り升たと横合からの一言に獲の一人は尚のわるさうに鼠狐く其首  
 と立去れと猶かにかくとの評議隔々最意ましく聞えける有附また千賀ノ浦は憤怒の餘り

弟子と引卒て浪士の跡と追來りしか案に相違の手術に恐れ放を我家へ引返し家族の者等と  
 急立て遽のに深川へ(舊宅)立退のせ其後難と避しめたり夫とも知らぬ高見山は眼頭に兎々  
 く刀の光りに逃散る火伍の提さへし六尺棒と借取て今しも此方へ追來た浪士兩人と渡りあ  
 ひ奮激突戰虚々實々霎時あしらひ居たりしかは先に其場と遁出せし相弟子の四五人も是に  
 氣と得て又盛のへし唎て喊て撃て薙れば今は浪士も打驚るま是はト怯む氣合と闘り高見山  
 は力の限り双手に棒と打振く勢ひ込て確立る必死の働らき獅子奮迅あたるへくも有さり  
 しの一人の浪士は過つて受損したる棒の沓に横面頰したゝのに脛はせられ何のは以て堪る  
 べき叫と其場に反仰て暫時は呼吸も絶果たり是と見より同伴の一人は怖氣と自のら心に迎  
 ひ友と援くる追もなく命のらく逃去し此方は強ても追さりしとを憚而高見山は聲仆し  
 たる一人の浪士と相弟子と共に扶け起し傷所と更ため呼吸すに忽地心づきたるが其身の不  
 覺と深く恥ぢて厚く粗暴の罪と謝人立多き其中と潜りて竊のに逃去しは最も可笑風情なり  
 しと「現に光陰は白駒の隙と過るが如く紅姫の梭と投するに似て寔や放てる矢よりも速く  
 いつしの慶應の三年も名残なく暮果て同じく四年と改たまりぬ是より先高見山は勝相撲の  
 番數と重ね幕の内に昇りしのは當時破竹の猛勢にて敵する者もなりのし程なり憚而其年の



四月改元ありて年號と明治と稱び爾來一世一元の永式となす去年の冬將軍徳川公職と辭し一朝政權と奉還せしより從來の權職上大老老中、若年寄、諸奉行は云も更なり下辻番の役人に至るまで不殘其職と放たれて海内維新の大變革萬機御親裁となりたるにぞ播州姫路の城主酒井雅樂頭どのにも大老職の印綬と解られ藩地姫路へ歸城せられぬ此時に當りてお抱へ相撲高見山と始め境川、手柄山、相生、兜山、の五名は更にお抱へと解る、旨の口達ありて一藩の混雜一方ならず然れば五名の力士等も今更遺憾の限りにあれど奈那ども詮方なければ一ト先御請はなせしものども積年恩顧と蒙むりたる情義に依て離れがたく何のぞ協議の其中に境川は不得止るの事故ありて尾州侯のお招きとなりお召抱へととなりたる旨四名の者へ披露あるより急に高見山は發議者となり手柄山、相生、兜山、の三名と呼集へて談するやう、時世時節とは云ながら上將軍家と始めとして諸大名より旗本まで遷り變つた今度の改革我等四人も其如くお抱へは解れたれど忠臣は二君に仕へすとやら古語もあり相撲風情の我等にも積る御恩は武士もおなじく又御家來も同様なり然れば今更お抱へと解れしとて他の雇人と見る如く忽地外の抱へとならば其薄情と人も尤め又良心にも恥るに非ずや就ては今後假令一粒の米一緡の錢と頂戴せずとも積年の御恩報じに各自斷乎と決心して必らず外の

お招きと謝し永く紀念となさん爲番附の記名へは矢張是までの通り姫路の二字と殘し母他の聞えの宜のみならず堅き志探も顯はるべしと語ると聞て三名も現に道理と領承ひて其場に誓約と取結び直ちに右の趣きと書面に認ため酒井侯の御名代として當地大手前、藩邸に在勤する公用人中新井何某の許へ差出せしに願之趣き殊勝なりとて殊の外感賞され追てお國元へ進達の上沙汰とべしといと懇切に言渡されぬ

第拾八番

借も四名の力士等は堅く誓約と立たる趣意の書面と姫路侯へ奉呈り許否の御沙汰と待てり爰に又高見山大五郎は當時旭の勢ひ有て最負の客の數多くこう行毎の贈物纏頭祝儀山と爲し身に剩る榮譽と得たれば新師匠なる千賀ノ浦にも事由と告げ其身は兩國若松町（同朋町とも云なる）舊細見百助（舊旗本）の邸内に一戸と持ち故郷上總の國大豆谷村より老母と小兒と迎ひ取り（妻何某は之より先病に罹りて没す）侍養の孝と盡せしは寔に初志に違はざる義胆左こそと思はれたり當時柳橋の藝妓にお兼と呼ぶる流行妓あり性質任侠と抱きて往々愉快の舉動有より豪客常にお兼と聘して酒間の一さやうとなすお兼は能飲み能談す故に人呼でがら兼と綽名せり乃日柳橋の藝妓競ふて有名の力士と馴おやまは相生にお〇〇は磐石



に其餘二三名各自想ふ力士に寄る獨りか兼は高見山大五郎と誓ふて堅く伉儷の約と結び或人媒妁して婚儀とも訂びたる交情なれば平常高見山は柳橋裏川岸なるか兼の家へ起臥するの日多ありしとぞ然るに此年(明治元年十二月)の中旬頃高見山は横濱の最負客に招き寄られ暫時彼地に遊びとりて其十二月三十日漸やく東京へ歸り來り陽春の仕度の何や彼や心せぬしき屈托に我家の方と殘らず濟せ黄昏頃より柳橋のお兼の宅へ音訊ひ往くにお兼は倉辻さ其中に高見山と一ト間に招き「關取おまへが留守の間に異な事と聞こみましたか是が眞實信ならば豫て四名の約束も今更詮ない小田原話しおまへも嘸のしお聞だらうと變つた調子の言葉の綾に高見山は不審晴す「異な事と實如何云仔細と問ばお兼は答へて云やう」如何云譯の知らないがおまへが横濱へ往た留守日頃兄弟同様に往來ひする那の相生關と土州様(山内容堂公)のらお招きになり御酒頂戴の其席にてお抱への御沙汰があつたよもやとおもふた相生關は忽地其首で御請申し拜領品の其上に名さへ綾瀬川山左衛門と賜はりしし確のに聞て置ましたと聞とも流石高見山は是と實説と妄りに信せず心中深く疑團と生じ勿々人と四方へ遣はし相生松五郎が舉動と密かに探索するに那方は當時日本に肩と並ぶるものもなき豪華君の愛顧と得て心中昇天の喜悅あれば誰にも憚る氣色なく却つて是と榮

譽と思ひ廣く吹聴なす程なれば見聞の人は立歸りて詳に高見山へ報知なすより儲は愈々相生は囊の誓と渝たるのと怒氣滿面に顯れたりさるのちに性急活潑なる高見山初めお兼が話しにては半信半疑にありたるが即時四方の報知に因いよくお兼の話しに違はず公然相生松五郎は土州のお抱へと成たる事と確のに聞得て益々怒り囊に四名は同盟して假令御扶持は受けずとも數年受たる御恩報じこの後決して他家へは召されず姫路の二字と番附に記して後の紀念になさんと誠と込たる願書まで頭首と揃へて差出せし其墨のまだ乾ぬ間に二君に仕へる不忠の舉動如何世間が變ればとて武士も同じき天下の力士帯刀御免の身として一朝土州の勢利に惑ひ姫路の舊恩と忘るゝのみの我々三名の同盟者と欺ひきたること驚怪なれ卒々我にも有意志的と直ちに手柄山と兜山とへ書翰と送り急に相談の事あれば早速參會下されいと使と以て促がせしを時しも大晦日に際り世間は節期の大雜沓に兩力士も急に來合せ殊に側の甲乙まで今日は師走の大つこもり必らず今日に限る事は來春緩々談判なすとも決して不都合あるまじと宥める言葉に高見山も道理なりと胸と摩り一時自ら怒氣と抑へ其夜と明せばわら玉の年たらのへる四方の春暎々日の出の朝より市中は去年と事變り屠蘇の機嫌の門禮者往來賑はふ繁昌は現にや東都の花なるべし茲にまた綾瀬川山



左衛門は常に交情密き高見山が十二月の中旬より横濱へ往たりと聞居たりしが除夕節に歸宅せしとの噂あれば年始と兼て土州侯へ抱へになりし事情とも篤と咄して置んものと元日早々柳橋なるお兼の宅へ音訊を居常に變る待遇にて碌々會釋もなさざる容子殊に高見山は留守なりとて面會せざる景狀に備はど早くも肚裏に覺り察する處高見山は我身が同盟の意に背き土州のお抱へと成たると定めて怒りて居る故ならん好遮莫れ此方の勝手那何程の事のあらんと下婢に倉皇々々挨拶してお兼の宅より歸りしが夫より双方何となく隔意と生じたり憊而その年（明治二年）の正月三日九段坂の招魂社に大祭あり當日相撲と興行を縦覽勝手にあるものゝら諸人の群集山の如く淵とも埋む難沓なり此日高見山は他の相撲と諸侶に早く場所へ詰蒐居たるに綾瀬川は少し後れて出來り列座る相撲へ會釋はなせど獨り高見山へは言葉も交へず傲然として座に着たるが世間話しの其中に故と高見山へ聞がしに今度土州へ抱へとなりし其廣言と吐たるより獨双方に隙と生ずる其事情は次回と讀みて詳細のに知ると得べし

第拾九番

登下綾瀬川山左衛門は他言にして語る様今也 王政復古の世となり百事維新の制度に據り

上徳川の將軍職とら疾く朝廷へ奉還し國は藩縣と改たまり從來の大名衆すら如何なる事の分らぬ世界にヤレ舊恩を誓約だと小八間敷云やつは夫こそ舊弊どの頑固どのの組合にて時勢と知らぬ者どもなれ我身は聞たる事もあれば其舊弊や頑固と棄て現今の時節に順以往き假令世間で誹評なすとも理に背のねば祟りもなく法と守れば此身も安全寧ろ馬鹿正直といはるとより開化の人と呼ん覺悟左はあらずやと傍はらに人なき如き語勢と張り呻と笑ふと聞に付け高見山は烈火の如く怒り心頭に發せしめども御大切なる上の祭日殊に多勢の前もあれば所詮此首にて争ふとも障碍多くて甲斐ならんと獨り胸中に分別し唯一言とも發せずして無事に該場所と終りしが有恁次第にあるものゝら高見山は憤念ますく烈しく片時も忘るゝ隙なき折ら毎年正月の五日には相撲組合一同の初寄合とて年寄と始め關取まで兩國回向院前の相撲會所に集會し相撲規則の相談あるが恒例なれば此日も皆々例に依て朝より會所へ寄集まり夫々規則と評議し居たり此時綾瀬川も一座に列し高見山と相對ふて有たるものゝら互ひに睨み合ては居れど更に詞と交もる事なく自づと殺氣と含みてとり彼是する中一同の評議も次第に決し訖れば目出度一酌と催ふさんと其頃有名の相撲年寄伊勢ノ海、玉垣と始め各自二階の座敷と退ぞき別席に到りたれども高見山は依然として其席と



動きもやらねば他の相撲等は是と勤め強て酒席へ誘なはんと左右よりして促がせども高見山は少しも聴ず其人々に對つて云やう。今日は一年一度の集會殊に相撲の規則ばりの人々の正邪まで評議にのけて賞罰する最とも大切の日に有ながら仲間の内に不都合の者あるとさへ不問に措き何等の評議あらざりしは心得難き次第なり夫故斯云高見山は少しも目出度存じませねば祝ひの酒は飲不や各自方は御隨意に何れへなりと出われ我身は其首なる綾瀬川に問たき事の數々あれば暫時お聞下され度と膝と進めて屹然せり「其首なる關取綾瀬川高見山が御意得たし貴殿は嚮に我々四人と共に連判誓約して姫路侯へ奉まつりし願書の趣意と忘却せし誰あらふ天下の力士と呼喚さるゝ綾瀬川山左衛門が舊恩情誼も顧みず酒井侯の御沙汰も俟で盟と破り利に惑ひ他へお抱へに成しとは日頃似合ぬ貴殿の舉動夫のみならず招魂社にて世間話しに比へし大言能こそ大五郎等と辱しめたれ卒今日こそは違約なしたる仔細と聞ん疾語られよ返答如何と詰寄たる高見山が憤怒の景状すさまじくこそ見えてけれ」土俵の上の争格には恐るゝ人なき綾瀬川も徳義の上の詰問に確と詰りし當座の返答如何にせばやとおもひ兼ね羞俯いて言葉もなければ高見山は彌々焦燥再回山左衛門と詰責する様。凡そ力士といへる者は皆に膂力にのみ依ものならず勇義兩ながら具備して

こそ眞の力士と稱すべけれ然ると何ぞや數年愛顧と蒙りたる姫路侯の恩義と忘れ利さへ同盟の我々へ恥辱と予へて恬然と人もなげなる舉動あると誰の力士と稱べきぞ其事情と悟らずして世間の人の口々には我等三名の腸まで腐りし様に誹毀せられたる其面暗には今茲で汝の首と貰ひ受け違約なしたる言譯に姫路侯の屋敷へ捧げ我身も其首で腹掻割さ汝と共に冥土へ往ん心徐々に覺悟とせよ夫とも外に返答あるの奈何とと殿しい議論に綾瀬川は益々詰り進退維に谷りしと見るに見兼て年寄共は兩人と左右に分け隔て那方と宥め此方と諭し漸々高見山と別座に伴ひ種々中裁の談話となせと公私に關りし事情なれば輕々數肯も入す雲時黙止て居たりし中流石綾瀬川も他の年寄や相撲の前へ面目なしとやおもひけん別座へ強て誘引れし酒盃と揚得す席と辭し他に先だち歸宅せり高見山は夫と推し彼此所と辭し去とも宅へ歸るの外はあるまじ好是よりして山左衛門の宅へ押駈け做かけた出入と果さんものど心と決めて皆の者へ唯何氣なき挨拶なし會所の闕と跨ぎ出相撲茶屋の川平へ立寄り身仕度なして居たる處へ田子の浦(柳川侯のお抱へ)と磐石(藤堂侯のお抱へ)の兩人は遽忙く高見山が跡と躡來り一同の惣名代なりとの意にて頻りに仲裁と乞望めと烈火の勢ひ却々肯す終に兩個に事情と述べ折角の仲裁と聞ぬも餘りに強情なれと死と極めたる今度の



出入一世の榮譽に關はる事ゆゑ暫時我意に任せ呉よ然とて貴殿等への規模なければ腰に挿  
ひ此一刀は取も直さず我魂魄是とお預けやすべし是と會所へ持歸り皆の衆への復言よしな  
にお傳へ下されと常に其身の秘藏せし一刀兩個に手渡さなし开がま川平と立出しが何お  
もひけん高見山は其身の家へは入らずして米澤町なる師匠千賀浦が宅へ到りぬ

第二拾番

借も高見山大五郎は師匠の家と音訊ひしが未だ千賀ノ浦には初寄集の場處より歸らず家裡  
には細君と兄弟共のみ留守してあると幸ひと大五郎は何氣なく平素の通り茶の間へ通り會  
釋とはりて其後に佛間へ入て燈明點じ故三代目阿武松の靈牌に香と手向け念佛讀誦の其中  
に今度の事情と心に告げ三拜なして其座と退ぞき更に千賀ノ浦の細君に打對ひ借今日高  
見山が參りしは別儀にあらず今度此身に思ひ立たる事ありて至急遠國へ發足の期に迫りお  
名殘惜くも是より直當地と立去心体なり就て千賀ノ浦親方には永年お世話と蒙りしが今に  
万一の報謝もなさず此儘お分袂になるとおもへば我身に恥てお暇乞と述る言葉もあらざる  
仕合せ何卒御歸宅ありたらばよしなに御傳言下されたく遽然の用意に心も迫ば去來御腹と  
申べし随分御自愛なされよト重き師恩と先謝して是が此世の別れかとおもへばせき来る泪

と呑み込み挨拶倉皇千賀ノ浦の家と漸々立出て柳橋裏川岸なるお兼の家へ赴きつ今度の始  
末の決斷と残りなく物語り死ぬるは男の常なれば我身綾瀬川の首と得て姫路侯へ捧げし後  
割腹せしと聞たらば夫と此世の名殘にせよ事は今夜に迫りたれば雲時なりとも女々しくし  
て不吉の舉動なすなれト嚴どいはれてお兼は喫驚豫ての氣質と知ては居れぬ斯までの事  
あらうとはおもひかけねば胸潰れ言葉もなく茫然と顔打詠め居たりし折ら高見山は弟  
子と招き若松町(横山同朋町)なる我住家へ事理さへ告す何氣なく秘藏の一刀と取に遣し置  
かにのくとお兼と諭し酒肴と命じて快く三杯と傾け居たるに靈に自宅へ遣はし弟子は  
間もなく歸り來りて吩咐られし一刀と持飯りしと取より早く去ばトばり腰に挿み用意な  
したる身輕の行装引のらげて勇ましく出んとせると惹扯るお兼が別離の愛惜に有業素氣  
の大五郎も胸塞がりて稍雲時おもはず其首に猶豫しが忽地自のら氣と取直し噫我ながら不  
覺なりしと羈絆と断て袂と分ち歎くお兼と願りみず心投たる敵手の住家兩國加賀屋横町な  
る綾瀬川の家へ到り竊に家裡の容子と見るに綾瀬川の聲はせねと女房おやまと弟子共の談  
話は外に聞ゆるものゝ先戸口より案内するとおやまは聽て急ぎ立出高見山と見るよりも  
最懇慫に會釋なし先々是へと一ト間へ請じ茶煙草盆の饗應に如才内儀の取回しは有業粹妓







と猜されたり去ばまた高見山は今日の始末と憂はとも色に出さず徐々に年始の禮なき述べ重ねておやまにいへる様「今宵此方の關取に内々の用談ありて態々罷り越たるが關取には留守なるの但しは奥に如何ぞと問れておやまは不審顔まだ何事も聞得ぬにや氣の毒さうに答ふる様「今日關取には初寄合に出たまへで未だ歸りは御座りませぬとお約束もあるからば最早其中歸りませうのら暫時お待下されしと程よく待遇居たりけり

第二拾一番

今宵結局の談判して詮に寄なば刺ちがへ死でも世間へ潔白の名と表はさんと決心し待せも綾瀬川は歸宅の容子あらざるより借は我身が會所にて詰責したる語氣と覺りて家へも歸らず何處への身と潜めしと覺ゆたり左ある上は留守の家へ何時迄待て居るも甲斐なし好遮莫れ今宵の中に諸處と探りて環會んと尋思と決めて内儀にひらひ「是まで待に歸宅のなきは定めて餘處の用事に關りて急に外さぬ事と思へば亦出直して面會すべし歸宅あらば勿々に我家へ報知て下されト輕き言葉と殘し置き最優しげに會釋して門と靜りに立出しが心は頻りに慌燥ば日頃綾瀬川が往來ふ家と残りなく尋ね廻りて夜の更るとも知らざりけり先之き同朋町の自宅にては高見山の老母と伴伊十郎どが留守と護りて居たりし處へ弟子

の奴は使に來り仔細あり氣な刀の入用急にと言も心得難く是には定めて容子があらうト肚裏に覺れど強氣の母親唯一言も傳へずして弟子に一刀手渡し柳橋へと飯せし後其身は獨り佛前に念佛讀誦なし居たり浩る處へ門口より音訊來りし兩個の力士且見れば巽刻に川平にて高見山に分袂たる盤石と田子ノ浦なり老母は豫て見識の人達殊に揃ふて來れしは容子と尋ぬる因に屈竟能こそお尋ね下されしと兩個と一ト間へ請すれば兩個も老母へ會料なし聽て詞と揃へていふやう借御老母に折入てお委囑の一儀あり今度此方の關取と綾瀬川關との間に斯々云々の葛藤が起り既に先刻會所にて議論ありたる其中へ年寄中の惣代として斯云兩個が仲裁に入り種々關取と和めた甲斐に一時は勘辨の様子なりしが尋常ならぬ關取の氣性却々此まゝには濟そまじ畢竟するに綾瀬關が心得違ひの筋もあれば立腹さるゝは道理なれど夫と只願穩便に鎮めたいが我等の希望夫に就ては豫々より親孝行と評判の高い此方の關取唯一ト言は老母より勘辨してどの言葉があらば無事に治まる此出入此儀と達てお委囑の爲年寄衆や關取の惣代として此兩個が態々此家へ出向きましたト退引ならぬ言葉の柵老母は胸に堰どめて霎時尋思に暮たりしが頓て兩個に對へて云やう一同の惣惣代とて態々の來臨にあれば委細は忤が飯宅の後篤と説諭は致しますれど兼て氣疾の那が性質前刻も前



刻とて家に秘蔵の一刀と使の者に取に遣し何歟覺悟の爲体夫とおもへば此家へ再回皈つて  
 來やうのと今しも案じて居升どころト聞て兩個は打驚るも然らば前刻關取には刀と取に遣  
 されしか偕は愈々猶豫し難しさらば今より取て返し重ねて愈に相談の上高見山關に面會し  
 及ばぬまでも最一度和談の術と盡しやさん若も入違ふて歸宅あらば其邊篤と伊依頼すすと  
 會釋なしつゝ、兩人は急ぎて此首と歸り往く不題に高見山大五郎は其夜諸方と徘徊して飽ま  
 で綾瀬川に環會んと心當りと尋ぬれども更に姿も見ぬざるのみか追々更關世間は寢て最早  
 探索の術もあらねば止事と得ず我家へ悵然として販りしは丑三ッ過る頃なりとぞ老母は夫  
 と見るよりも偕は先刻參られし田子ノ浦と磐石關が怒りと和めて販し吳しの仙は兎もあれ  
 變りもなく無事に歸つて來られしは此上もなき目出度こと、案じ暮せし病さへ一時に癒へ  
 る心地はすれと綾瀬川との出入の事は如何結局たるならんと思ひながらに臥床に入り雲時  
 睡るむ其中に早告渡る八聲の鶏に驚るのされて起出つ旦見れば大五郎は臥床にからず小庭  
 の雨戸の開てあるは最訝のしと慌忙敷内外と急に見廻せば是は、什麼大五郎は井筒に寄  
 て水と浴び身体と清め合掌して天地と拜し居る様子に愁祈念と妨害しては、老母は我子の  
 心根と察しやりつゝ、氣と惱まし獨り朝飯の用意に、り座敷の掃除拭するとき大五郎も座

敷に戻り老母に夫と告ねども今日は此身と義の爲に棄ねばならぬ男子の意地是まで養育下  
 されし海より深き思さへ報ひもやらぬ不孝の罪許させ玉へといは、ぬにいねと老母も  
 愛惜の霧に惹るゝ煩惱心今朝の容子と察するに昨夜は事の成ずして再回出向くと覺ゆたり  
 引停たさは山々なれと私情ならぬ今度の出入強て止れば我子まで卑怯と人に呼れもすべし  
 如何せばやと親と子が案じる胸は愛情孝義沸る泪に朝飯のふき出すとも知らざり見かゝる  
 處へ門口より高見山關は在宅にのど頭首と揃へて入來りしは當時相撲組合に威權ある年寄  
 玉垣頼之助、伊勢海五太夫と始め其餘の年寄は云に及ばず大關、關脇、小結以下關取等まで  
 連なりて居處狹まで居並びつ時誼訖りて後今度の出入と百方仲裁の説諭と入られ今更高見  
 山も困じ果しが第一には日頃の交誼第二には多勢の心配兩様棄るは是又義ならず不如仲裁  
 に委せんには、早く自ら肚裡と決め其趣むさゝと一同へ答ぬしにぞ皆の者は其意と繼て勿々  
 綾瀬川へ對談し高見山が所望に任せて前約違犯の謝罪書と出させ數日結んで解ざりし力士  
 と力士が心の縛も漸々此日に和解たるは最も目出度き事にぞ有けるの、りしは、高見山  
 は前の頓末と詳細に書認め綾瀬川が謝罪書とも取添て再回姫路侯の公用人中新井何某許持  
 參なし猶其事情逐一に言上せしにぞ中新井氏にも深く高見山が義氣豪膽と感賞し早々早乘



脚と以て姫路に在る君侯へ委細と言上に及ばれし處君侯にも殊の外稱賛あり更にお抱への旨と達せられ猶高砂浦五郎と改名すべとの下命あり夫より御扶持として年々米代金七十五兩ツ、下賜はりしは實に一世の美談と云べし

附て白く其節兜山と手柄山には何の御沙汰もあらざりしと後に高見山より上申して遂に再回兩人とも同侯のお抱へとなり此件全たく結局せり

第二拾二番

凡そ人の世に處する難に當り艱に堪千辛屈せず萬苦撓まず能其志望と達する者天地間夫幾人のある況んや社會一小部分中の小部分に位し奮弊故癖の多く存せる相撲仲間にてや現時より當時の景状と回顧れば習慣深く浸潤して人々野蠻の醜行多く實に感然なる次第なり其最も苛酷なりしは相撲年寄或ひは又名有相撲の弟子と遇するの浮薄なる畜に衣食と供するのみにて一年兩度の晴相撲と始め諸國へ出稼の花相撲まで數回興行の給金は悉皆師匠(親方と云)の手に収め一文半錢だも弟子に與へず漸くにして幕下十兩取の關取に出世の末僅るに小遣と給するのみ其威權虎狼に等しく無情といふも淺穢のりき素より此相撲組合に入んとする者大概尋常一様の人にあらず或ひは放蕩に身と持崩し又は喧嘩に故郷と逐れ少

しく奮力と腕にすれば直ちに走つて江戸へ出で相撲の火伍に入もの多きも十中八九は辛酸に堪ず再回此群より脱走して無頼の黨類に伍するものあり其頃相撲の中に偷見ありしも亦故わり誠や錦繡の彩袍と土俵の上に輝し名と番附の上に揚るは容易ならざる難業なり粵に高砂浦五郎は其身是迄艱難と嘗來りたる事歴に徴し世間幾多の壯士輩が相撲の群に入と見て心中常に親方等の無情と慨き如何もなして苛酷なる此習慣と除のばやと頭と病して居たりけり去程に光陰は梭と投するよりも速くして明治も夢の間に四年とすぎ去り今茲は五年の春とはなりぬ一日高砂は我家にありて獨り猜々尋思するやう我往つ年故郷にある頃圖らず乞丐が一言に勵まされ終に祖先の遺業と措て一走此地に登りしより茲に十有三年來幸ひにして艱苦と忍び漸やく初志は達したれども到底相撲の業とて老後の策は立難れば近々其機と探り得て斷然廢業なして後身の進退と決せんものと獨り心と定めたれども此年月の高恩の萬分一も師匠(千賀ノ浦)に報せず此まゝ我身の思ひ通り廢業するは快のらず偕何とがなト報恩の思案に暮て居たる中不圖其胸に浮みし一策是ぞ寔に良計と竊るに喜悅の眉は開けと時期其機會にあらざればと未だ他言する事なく其年春場所の興行訖りて後夜瀬川。小柳等と濃州地方へ赴むさぬ恁而一日の事なりしが前夜より降しきりたる雨脚の正午



頃までも小歌なく相撲の興行は勿論出来ず皆其旅舎に休憩てとるに獨り高砂浦五郎はかも  
 ひ内にあれば兎や角と越方行末と案じ煩ひ燻らす煙艸の烟りより只願胸とぞ焦しぬる其徒  
 然につきてまた相撲仲間の悪弊杯如何もなして斐除き世の爲又は人の爲に力をつくし吳ん  
 ものと尋案に暮て居たりし折柄同じ仲間の力士等も降籠られし詮術なさに綾瀬川と始め小  
 柳等は高砂が旅舎へ音訊たるにぞ是幸ひと一ト間へ招き世間話しの其末に高砂は兩力士に  
 對ひ兼て機會がありたらば我心中と貴殿等に物語らんと思ひしが今日は幸ひ雨中の徒然氣  
 の散ぬ座に寄合たれば篤と一議と盡とべし外の事にはあらねども從來相撲仲間にて親方社  
 會の苛酷なる十兩以下の相撲の中は弟子に一錢の給金とも渡す皆悉く押領して師弟の間  
 に愛情なきゆる半途に業と廢るものは忽地其身の方向と失なひ相撲の果の零落しと世間  
 に見する惨きなさ素より是は誰罪と指していふべき事にはあらねども今にして改革せざれば  
 相撲の名譽は地に墜て終には無用の長物と呼れなん又今一條の悪弊と云は相撲年寄の筆頭  
 筆脇に座する者總じて相撲の會計と掌どり威權と弄して弱きと虐げ不正不公の所爲多く第  
 一東京の大塲所にて一年兩度の興行にも勸進元と云は名のみ其實那等が萬事と支配し利益  
 あれば黙止て告す損失あれば他に擡はす其狡猾も往時より傳へ來りし古儀なれば是とも疾

く療治して健全無瑕の身體とせざれば終には全體より肝腎なる腸とも腐敗さすべし此二  
 ツの弊習と改たむるは決して我々の私ならず公然たる相撲仲間の利益にあれば此高砂は  
 貴殿等と力と戮せ幾百千の相撲に代り身と犠牲になすまでも飽迄盡力なさんは如何と憤然  
 として談すれば綾瀬川も小柳も比しく高砂が義氣と感じ一議に及ばず同意せしむば善は愈  
 げと其一行の相撲取等と打集へ前の事情と説示せしに不殘是と賛成して同意合体したりし  
 にぞ高砂は倍々意と得て其座に連判の盟約書と出來へ我より先に血判し順と追て差回すに  
 各々他に劣らじと指頭と劈きの記名の下に血判せしは潔きよくこそ見えてけれ斯一同の決  
 心と得たるより高砂は歡喜に堪ず忽地大盃と舉げ衆に對ひ各々方にも知らるゝならん昔時  
 徳川家康公には千辛萬苦の功成て四海と治め給ひしより世々其家は將軍の職と奉じ天下は  
 武家に歸したる如く三百年來打續きしが世の開けるに隨がつて政治に惡臭と生せしより終  
 には勤王の義士四方に起りて徳川の政府と倒し 王政維新の今日と改まりしは好撲範相撲  
 仲間も徳川の末世に似たる惡習あり疾打拂ふて明らかに治まる滂代の自由と得ばやと諭言  
 ばなしも義に勇む力士の族が鐵石心轉ばすべくも見ぬざりけり



去程に高砂浦五郎。綾瀬川山左衛門。小柳常吉等は濃州岐阜驛の旅舎にて相撲組合の改革と謀り衆志同一の盟約と爲し訖りて後諸所にて相撲の興行となし其年の十月下旬勢州桑名驛へ乗込ぬ此一行は此地にて興行爲し上直ちに尾州名古屋へ立越え一ト興行と名殘として一同東京へ歸るべきの手筈なるより心なき相撲取等は唯東京へ歸るのみと娯樂とし敢て餘念もあらずりしが於て是高砂は獨り情々胸算して最早我等が企ての機會も目前に進み來れり夫に就て今日共に謀るべきは綾瀬川山左衛門なり卒や那れ相談して日頃の計畫と施こさばやと一日綾瀬川が旅舎と音訊ひ竊かに是と議る様。曩に岐阜にて盟約せし彼の二ヶ條の改良手段は綿容易には似たれども舊弊古癖の洗濯なれば一朝一夕には行はるべしとも思はれず寔に至難事業と云べし就て我身の考思には豫ての一義と擔當て貴殿の我等孰にても一人此地に踏止まり爰と改正組の根據となし其餘の者は飯京の上臍と堅めて断然と親方社會と談判におびり萬一二ヶ條とも肯れずば相撲一同へ是と説き同意の者は何百名なり此地へ至急繰揚させなば新正純良の一派の相撲と更に當地にて組織べし併し那にもまた荒神様あり如何なる策と施こすや計られぬとも畢竟相撲取ありての親方なれば我策妙に行はれて弟子に離るゝの場合に至らば必定改革の熟議と遂なん此計略は如何ぞと問ば綾瀬川は横手と

打ち有業は大哥思考たり什麼も夫を良計ならん幸ひ大哥は此土地に馴染ても居り且はまた根據となすべき處にあれば雲時此地に残り居られよ我身は是より打揚次第小柳等と飯京の上確と親方衆と論判して豫ての目的と達するやう必死の力と盡すべし若また親方衆の頑固にして一も我々が請願と肯入すば盟約通り袖打拂ひ同志の相撲と語合て再回當地へ繰揚ん其時こそは高砂關「言にや及ぶ一派と立」互ひに自由獨立して「至正至公の相撲と組立」花々敷興行なさん務められよと勇者の密議迭みに意裏と照し合猶も其他の事項まで残りなく打談らひ遂に高砂浦五郎は此地に残り止まる事に決し其後一行の相撲等へ右の趣ひきと説示せしに皆々高砂と綾瀬川との義舉と感じて只願其計策と贊稱し萬一談判の纏まらずば再回當地へ引返さんと勇み立たる景狀に高砂、綾瀬川、小柳等はいよく前約と確めたりとぞ

第二拾四番

既に高砂浦五郎等は相撲改良の計畫も稍決まり唯是よりは綾瀬川山左衛門が諸京の上の談判にて合體なすの但しはまた分離なすの二に歸せんと其事のみと待居たり爾るのらにまた浦五郎は獨り熟々勘考する様迎も今度の企は至難の上にも至難して到底頑固者流の爲に障害らるゝ事も有なん素より我事成すとも此身は強ち惜むに足ねと有爾時は男兒の意地只



黙々と業と廢て此ま、故郷へも歸り難し斯云時の談向には願ふてもなき最負の客あり豫て義氣ある方なれば那方に據て謀議と遂んど當時名古屋に興行中ゆる同處より一里計り熱田驛の魚問屋石原三右衛門といへる方へ赴きつ前の次第の一伍一什と詳びらるに物語り就て此ま、高砂には此地に足と停むる覺悟若御妙案もひは、謹んで伺ひたしと思ひ入て陳立しと主人は篤と聞終り「日頃のらの和主が氣質左もこそ有め感心せり畢竟今度の發起も衆と益し害と除く一己の私情にあらざれば十分努力すべきは勿論時誼に依なば分離して改正組の一派と立て世にも人にも恥ざる様百方手段と廻らすべしと懇々との諭示あり猶また高砂に對ひて言やう爾有る場合に臨みし上は各自覺悟なくては協はず幸ひ綾瀬川、小柳と始め有名力士等名古屋にありて今しも興行中なれば此興行と打上次第熱田驛にて一ト場所携へ和主が興行元となりて一旗揚なば如何ぞや其談判さへ關ひなば我等は蔭より是と補助け費用は悉皆辨じ遣し若都合克く利益と得なば是と和主に進すべく若不入にして損失とるども決して和主には擔はすまじと最深切なる語と聞高砂は甚く悦び厚く愛顧の情誼と謝し如何も仰に隨ふべしとて匆々に名古屋へ歸り夫とはなくして年寄衆へ熱田驛にて興行の相談と爲し處る速やのに整ひしかば心中幸先能と喜悦び其趣きと石原方へ通報して興行訖ると待

第二拾五番

居たり去程に高砂等の一行は名古屋の興行と打揚たるより次で熱田驛へ乗込ついで初日と出せし所有繫此地は高砂と愛顧の客多くもあり殊に此度のこう行には勸進元と聞のらに四方より相競ふて或ひは積物飾物豊牌に幟と贈られて其景氣最も盛んに日々場所は溢るゝばのり朝より蟻志蟻志詰のけて夥多しき人氣と取り首尾よく千秋樂の日迄不思議に入と續けし故爰に意外の利益と得て悉皆計算の餘七百圓計りと剩し稍其基礎と堅めしとぞ

相撲取ならぶや秋の韓錦。其秋去りて冬は來つ此年もはや十一月の中津と過て末にぞなりぬ有爾は熱田驛に興行の相撲取等は東京の冬場所も近寄たれば約束通り歸府せんと年寄からの觸廻しに各自用意となす中に獨り高砂浦五郎は豫て綾瀬川小柳等と堅く誓ひ此地に残るの手筈なるより一夜同處の割烹店に登り竊のに此首へ師匠千賀ノ浦と招待し厚く馳走と爲したる後更ためて言るゝ様扱も親方には十三年以來海山積る御恩と蒙り其お蔭にて高砂も今や前頭の筆頭にまで出世なしゝは父母にも優て辱けなく何時か御恩と報じたしと旦夕忘るゝ隙はあらねど不肖の身として今日が日まで萬分一の報謝もいたさず如何も慚愧に堪ざる次第と年月思ひと惱まし居たるに時こそ得たれ今度の場所は親方が勸進元の當番なれば



此機に乗じて從來の弊と洗ひ興行中の諸計算は残らず勸進元にて左右するの運びに至らば第一親方の利益に歸するのみならず年寄衆の悪習も是より正しく改たまりて年に兩度の勸進元の名實ニツながら全たるべし加筋らず相撲仲間の親分衆が弟子と扱ふ無慈悲の始末唯此まゝに棄置なば何時の改正の期あるべき夫とふもひ是とふもふて今度我身が發起となり綾瀬川等と相談の上前頼の二ヶ條と打討き斷然改良の一舉有に就ては恁々云々の計策あり若し東京の年寄衆が強て執拗と言張て我等の談判と肯入すば其時にこそ高砂等は斯々云々の思慮あれ素より將來の事にしあれば成否固より期し難けれと時前に因なば今と限り暫時お分別やそやも圖り知られぬ這回の一條深くは推察下されたしと始めて明そ一伍一什と千賀ノ浦は聞訖りておまた度歎息し如何も汝がいはるゝ通り往時よりの習慣にて筆頭筆脇(相撲年寄)が私情の舉動親方衆が無慈悲の事柄言に忍びぬ有様ながら是誰罪と指名すべき者にあらねば是までも言す語らで過ぎ越しが汝が日頃の氣質にて改正なさんとの企ては我弟子ながら適れなる覺悟の程とは譽ながら肚の裏には不容易なる難に當りて若も亦却て其身と過まつべき棧梯にばし成はせぬのと深くも案じて猶彼是と开が身の上の諸事と示諭し是非も泪に弟子師匠其夜は袂と分ちしが高砂は其翌日前の料理店へ年寄衆より相撲取

第二拾六番

于時明治五年十二月の中旬綾瀬川山左衛門等は尾州名古屋の興行と打納め年寄千賀の浦と共に勢州四日市驛より漁船に乗込海上風波の難もなく横濱港へ安着し夫より一同東京へ歸りしに恰も好興州筋へ興行に出居りし境川等と始として關取衆は諸道より追々販り着たるものあら茲に綾瀬川も力と得て先不取敢境川が宿所と訪ぬ一別以來の時誼口誼互ひに無事と祝し合世間話しの其末に豫て高砂と謀りし一義と事おちもなく物語り如何にも從來の習慣とて公正ならぬ次第もあれば此舉に惡弊と改ためんは至極の良計なるべしと言業と極めて陳立ると境川は篤と開心に感ずる處や有けん直ちに其議と賛成して一味合体の誓となせり然れば速やのに年寄衆へ掛合の手順に及ぶべしと翌日綾瀬川は東兩國なる相撲組の會



所へ到り當時相撲年寄の筆頭なる玉垣額之助。伊勢海五太夫等に對ひ彼の改正の二ヶ條と手づよく談判に及びたれども奈那せん年寄方は多勢にして綾瀬川は孤立なれば却々此方の議論も立す殊に新規の改正説耳に逆ふの苦言にあれば是と容んと云ものは唯の一人もあらずして反つて綾瀬川は多勢の者に説諭せらるゝ委となり一戰敗色と呈せしものから無余儀其場と引取りしが境川は夫と聞き獲に同意の交誼もあれば急に一書と認ためて名古屋に残れる高砂が許へ飛せぬ爰にまた高砂は東京よりの報道あると一日千秋の思ひと爲し待に待たる其折から綾瀬川よりの便りに先立ち境川浪右衛門よりの飛書と得たれば取手も疾く封押披き遣はしく讀下せば始めに今度の一條と略記し綾瀬川よりの報知に因て詳しく願末と承知せりと堅く一味の誓詞と陳べ次に高砂が義氣と稱し且また厚く高志と謝し重ねて東京の情態と述て曰甚はだ以て綾瀬川一名にては心元なし至急貸殿も上京ありて決然論判いたされなば或ひは成就の期に達せんと懇々上京と勧め越せしが獲に綾瀬川が擔任て歸京なせし其後に未だ通報もあらざる前ゆゑ免まれ角まれ其方の摸樣と聞た其上に出京なすども遅るまじと心の裡に尋思と決め第二のたよりと待中も境川よりの書中に寄ば十の八九は成就とあるに大いに喜悅の眉と開き日にく吉報とのみ待てとり然るに其後綾瀬川よりの

報知と見るに却々年寄衆の勢力強く更に肯入氣色あらねば今猶百方盡力中とあるに高砂落胆し長嘆息して天と仰ぎ噫我事は成ざるの又是非もなき次第にこそと獨り慷慨の泪に暮れ鬱々として樂まず猶後報の至ると待しに早東京の市中にまで其事隠れなく傳播して高砂と愛顧の客より屢々書信と寄らるゝ中愈々綾瀬川は舌戦に敗と取り力足ざるに屈しけん敵の陣門へ降伏せしと聞しゆば爰に高砂は斷然歸京の念と絶ち又奈那ともそる能はされば遂に愛知に止まりて一派の相撲と組織んといよく決心と堅めたり

第二拾七番

去ればまた往く水の流れは早く。其年もいつしに暮果て明れば明治六年の一月とはなれりける爰に東京の相撲組は回向阮の境内にて暮場所の興行（相撲組合にては一般に舊曆と慣用し舊曆の十二月と新曆の一月に當ると以て今日に至るまで一月の大場所と暮場所と稱の習慣なり）あるに際し客年名古屋に止まりて相撲は高砂浦五郎。小柳常吉。と始め既に製工し番附の名前と刪り或ひは墨と引て其姓名と抹殺し公然江湖へ配付せしにぞ高砂等は大いに怒り悪くき年寄どもの舉動のな此遺恨と胆に銘じ他日必らず復讐せんと同志の相撲等にも親く示し其年の二月中旬高砂は獨り東京へ來しに折しも大場所のこう行終り神田明



神の境内にて稽古相撲の興行中と聞し幸ひ直ちに其場へ赴きつ幕内幕下の關取共に面會し必至と改正説の可なる論じ同志の族と誘なひ飯り一派の相撲に組入んと懇々遊説と試むれど皆年寄共の威に怯て口頭是と賛成するのみ眞實左袒の様子あらねば共に謀るの人々ならしと早くも高砂は東京と去て名古屋へ飯り改正相撲組と云と立て自ら其組の取締と成て愛知縣へ上願し更に營業鑑札と請受諸所にて相撲と興行せる中爰に一椿事と惹出したる顛末と記んに或時大和地方とて行中同國の奈良にて一場所の相撲ありしが元來當所には五十組と稱ふる素人相撲あり五十人の力士と集め素人ながらも川山の名と呼せ此近郷にて折々花相撲と催せば遂に五十組と他もよび自づと其號の如くなれり此五十組の親方株と櫻山伊六といひ鳥なき里の蝙蝠と狭き土地に羽翼と翔げ剛愎自用弱さと被さ心良らぬ男なるが頃日高砂浦五郎が勸進元にて改正組の相撲こう行すると聞卒我組も見物して彼等が技倆と見て置んと同勢凡て六十名餘初日の朝より打揃て其こう行場へ來りしが木戸へは五十組なりと名乗て一錢だも拂ふ事なく殊に上等の棧敷へ上りて傍若無人に見物し盛んに飲食なせしものども更に其料とも拂はねば高砂は見るに見兼ね間に得地ぬ義氣快慶忽地憤怒と胸間に騰せ那の櫻山が傲然と棧敷に見物なし居る處へ蕪々地に昇り往き突然櫻山に打對ひ。貴殿等は何處如何なる方よりして免許と得しのは知されども惣じて諸般のこう行收は看客と招て其料と受け是と勸進元の利徳となど有爾ば相撲に無給の者なく看客に無錢の人なき筈なり夫等の事は明治の今日三才子も知た道理なると何とおもひ辭めしにや六十餘名の同勢と引連ながら木戸も拂はず剩さへ其方で上等の棧敷と好み其代のみ酒食の料まで拂はぬと云無法の舉動我と誰とのおもひて居る今度日本に一派と立たる改正相撲組の取締高砂浦五郎と知らずやと大聲揚て怒鳴立れを理非分別せぬ櫻山心中少しく恐れしが多勢の手前と苦笑して假令其方が改正組の高砂でも取締でも奈良には奈良の風習ありて櫻山が子方の者五十人は五十組と他にも呼れ土地にてこう行のある場所へは無錢で道入が尋常だ如何程叫ささわぐとも汝等ごときに一錢だも我金錢と拂はんやと人もなげなる挨拶に事こそ起れと一同は顔見合して居たりけり

第二拾八番

高砂浦五郎は櫻山が其一言と聞よりも満面に朱と沃ぎし如く汝等いよく其料と拂はぬがらは世にいふ盗人も同じき罪あり我は是より汝等が罪の次第と直ちに其筋へ訴たへやせば霎時其首に扣てとれと睨まへながら棧敷と降り既に同處の縣廳へ出訴なさんと俺操と土地



の顔役兵庫屋平助といへるが是と聞き急ぎ高砂と引とめ頻りに穩めて居たる中機敷に居たる櫻山等は卒飯らんとて子方と引連れ既に木戸まで出んとしたると改正組の相撲等は巽刻に高砂が機敷にて罵り合し奴等と見るより道に柱にて一人も出さず四五人して身輕に打扮強て木戸より出るとならば入たる時の木戸錢と機敷の代と酒食の料と爰へ並べて飯られよ若左も無ば汝等と一人なりとも此場より怎麼で出して遣べきぞ如何に〜と問詰ると答もなさで五七人無理に出んとするよりも最早容赦すべきにあらすと突然拳と振盪め滅多無性に打のれば那方も多勢と頼みとなしソレ組合が撃れたぞよ負傷させられなど口々に動揺めき連て闘み合その騒動は大方ならず浦五郎は兵庫屋に扯とめられて居たりしが場所より急報と得たりしかばいよく以て打棄がたしと飛出さんとなしたると再回兵庫屋は是と制して其許と放ち遣なばまぞ〜喧嘩と大きくするのみ兎もあれ我身に任せよと強て高砂と家へ停置き其身は乾兒と十四五名急ぎ仕度と整のへさせ直ちに相撲場へ引連めき組つ解れの敵味方が前後左右に争そひ居る喧嘩と双方へ引分ち段々櫻山へ談判して遂に高砂へ賄話と入させ漸々和談とのひしこの事忽地遠近の聞ぬ其翌日より高砂の相撲と見んとて山なす見物の大入に災難却つて幸福となり是よりして高砂の名四方に轟るき強きと推さ

弱と助くるの評判と得且此時のこう行も不時の利潤と得たりと云有兩のらに改正組は當時の勢力破竹の如く河内。和泉。大和。の内にて數度のこう行も無事に打搦勢ひ込で大坂へ乗こみしに大坂の角舩組にも改正組の組織と聞知て舊來の組合と脱離なし高砂に依て改正組へ加盟せし者ありたるより大坂の角舩組は大きに是と忌憚ひ遂に改正組と親しませず種々面倒なる葛藤と惹起しおは前途と圖りて高砂は大坂に永居せず進んで播州地へこう行に赴き久々にて舊主君姫路侯へ拜謁し維新後角舩の變革と一伍一什言上に及し處酒井公にも殊の外に感悅せられ種々の賜物などありしおは舊情の地と去に忍びず暫時姫路に滞在しぬ爰に又改正組の美談と云は元來播州地方は維新前頗ぶる穢多の多き土地にて明治の以後新平民と改稱ありても兎角に平民と折合す飾磨縣にては屢々是等の説諭ありて頗ぶる盡力の時も時新平民の中力量他に勝れし者は角舩營業の鑑札と受け頼りに腕と摩りて居れど奈何せん此徒と伍して相撲と取ものあらざれば彼等も常に之と歎き空しく皮肉と肥し居たるに幸は此度改正組の相撲共が姫路に滞在中と聞より或人に紹介と委囑合併角舩の取組と請たれども却々高砂には此相撲と承諾すまじとおもひの外是を改正の大眼目と快く承引れしおは勿々興行の準備となし花々敷觸太鼓と回せしに近來稀なる相撲にあれば初日より山なす



大入小家も宛がら崩る、計りに殊の外なる景氣ながらも見物は口々に新平民の相撲取と非人畜生杯と誹謗せしより新平民は是と怒りこう行場に於て大騒動と惹起し死傷さへも多ありしが改正組の相撲には敢て一人の怪我あらずりしは實に天幸と謂つべし此事心ある人は見聞て大いに高砂か度量宏きと感賞し于今那地の相撲好は美談となして措ざる由聞がまに序に記しぬ

### 第二拾九番

夫よりして改正組の一行は岡山備前尾の道(備後)邊とこう行し轉て四國路へ渡航なし阿波の徳島より讃州高松近郷と打回り多度津と終局として大坂へ歸りしに此時西京にては三都合併の大角瓶と催すの仕度最中と聞き今こそ東京の角瓶年寄等に曩日の復仇と爲す機会と直ちに西京へ乗込往き大騒動と惹起せし時圖らず當時の愛知縣令鷲尾隆聚君に浦五郎は拜謁し同地と花々敷引揚しは人の能知る處なれば敢て茲に諄々は記さず借も高砂浦五郎は其一組と引卒して尾州名古屋へ歸りしが縣令鷲尾隆聚君は西京にて見聞せし浦五郎が義勇と感ぜ召出して愛知縣下諸興行取締役と申渡し年俸若干と下賜されしは寔に一世の榮譽とこそ申べけれ去らに改正組も追々力士の數と増し大坂よりは熊ヶ嶽。西京よりは磯風杯い

ふ強の者の加はりしうば關西の地は此一組の威風然から凛然として改正組の高砂といつは三才子も其名と知ると云斯して明治七年も過ぎ同じく八年の秋なりし浦五郎は肚裏におもふやう一回我組と東京に移し舊弊組と肩と比べて贏輸と試るみんものどさうに用意と爲しめて陸路と東京へと押登り一時馬喰町へ旅宿と定めて神田佐久間町なる秋葉神社の境内にて改正組の興行ありさらぬだに新奇と好む都會の癖未だ見馴ず見馴ぬ角撲取の顔觸にもあり且その頭取は曩に東京の相撲組と分離したる高砂浦五郎と聞ものから初日より大人氣にて一戰勝と占たるより浦五郎は神田龍閑町に家居と構ゆ爰と改正組の根據となしぬ夫より後は東北地方と此一行は打回り飽まで兩國組(舊來の東京相撲組と云)に抗抵し常に軋轢の争そひ絶ず然るに明治十一年二月五日東京警視本署よりは甲第十一號の布達と以て左の規則と發布されたり

#### ○角瓶并ひに行司取締規則

第一條 角瓶及び行司たらんと欲するものは其區戸長并びに組合取締の奥印と以て警視本署へ願ひ出鑑札と受べし

第二條 居處と轉する時は第一條の手續と以て鑑札書換と願ひ出べし(但書は略す)



第三條 角艦及び行司は東京府下と一ト組となし角艦は年寄。行司は重立たるものにて年番と定め組合取締となすべし(但し年番交換の都度其姓名と届け出づべし)

第四條 無鑑札之者及び組合に入らずして其業となせし許さず  
と有たるより改正組と兩國組が遂に合併したる次第は大團圓に説盡さん

第三十番

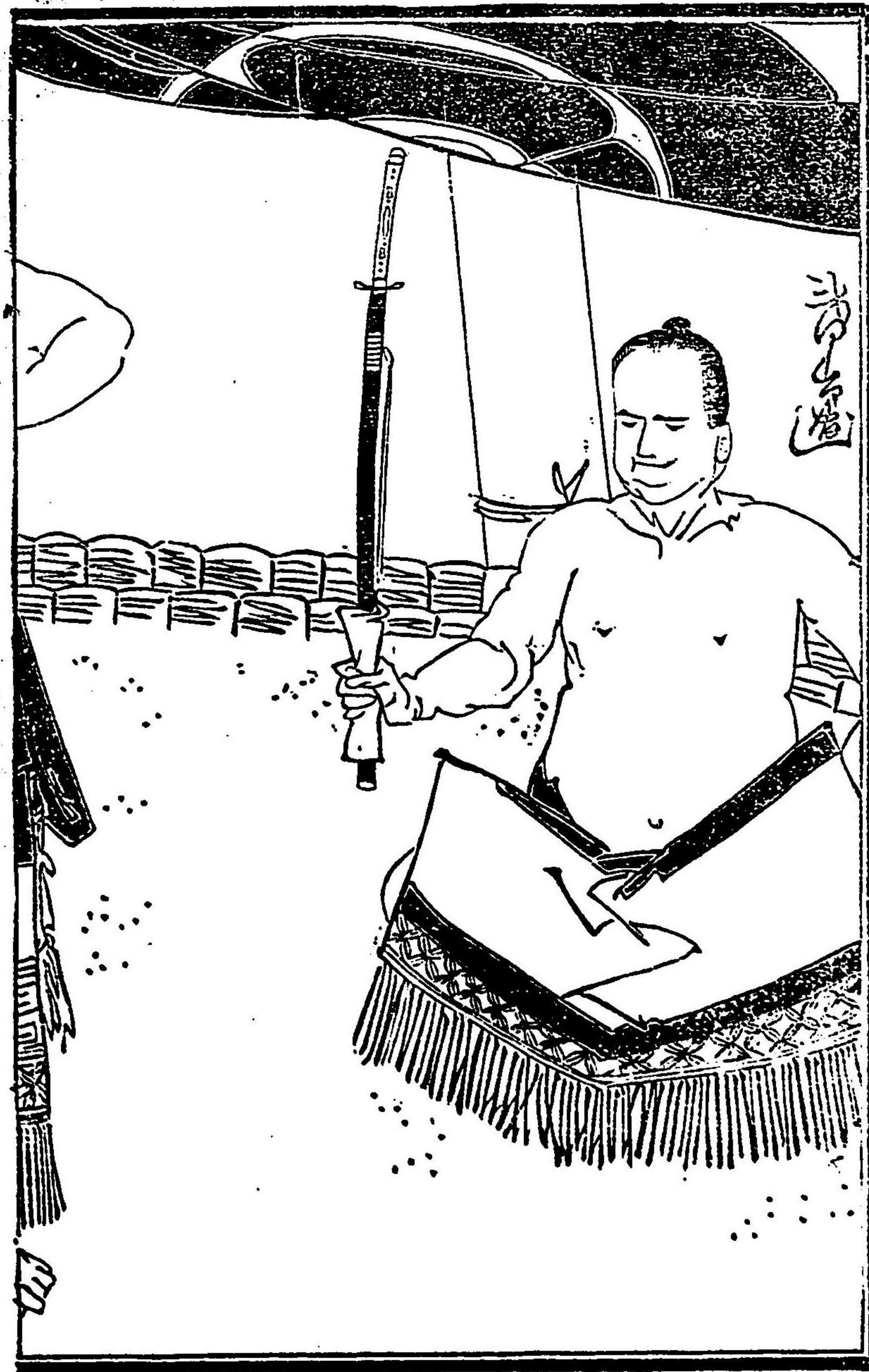
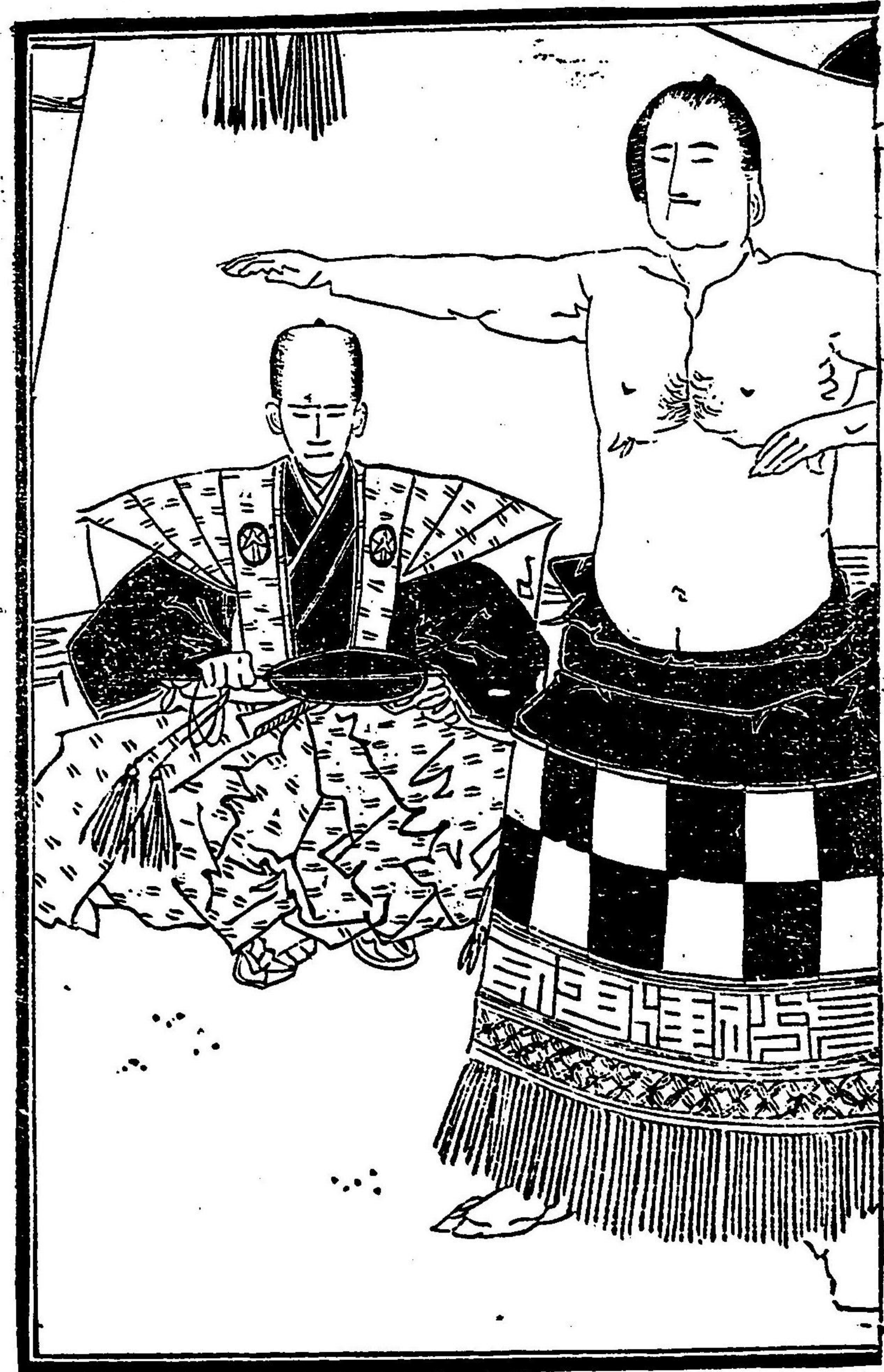
此時に丁りて有繋老練の聞ある兩國組の年寄共は逸早くも我組のみと東京府下の相撲組と自稱し擅まゝに組合中の年寄と以て取締の役に任じ其趣と警視本署へ届出で次で取締は奥印となし其組の相撲一同の營業鑑札と願ひたるより兩國組のみは無事に興行の公権と得たれども獨り改正組の一行は此御布達によりて兩組合併の趣意ならんと思惟せしにぞ未だ其手續も成す居りしに既に兩國組に於ては一ト組の相撲鑑札と願下たりとの報知と聞き高砂浦五郎は不審に堪ず直ちに警視本署へ出頭して此度角艦取締御規則發布に付ては兩國改正の二派共に合併すべきの處如何なる事情ありての事や獨り兩國組に於ては營業上の交誼もなく一應兩派の相談とも盡さずして擅まゝに其組のみ東京府下の相撲なりと自稱し早其事と官へも届けに及びたりと道路の風説に聞込たり眞實確説に候は、今度の御布達の

趣旨にも背き第一我改正組の相撲共は罪なくして營業權と罷れたるの不幸に陥り今日より數百人は飢餓に迫るの困苦と致せり若夫兩國相撲組の獨り東京府の相撲組合なりと自稱するを得ば我改正組も又東京相撲組合なりと自稱し更に一人の取締と置き營業鑑札の下附と請んも妨げなからん然れども其等の事は決して爲すべきの業ならず官にもまたお許しあるまじ就ては曩に兩國組の届け出たる組合と解釋さ東京府下と一組となすの公令に基づき兩組合併の御沙汰ある様只願に乞申せしむるに官にも御詮議の筋ありてや其二月より五月の下旬まで何等の御沙汰もあらざりしが其間改正組は更に營業もせざりしものから艱難窮苦は一ト方ならず去れども剛膽なる高砂は少しも屈する色と見せず部下の相撲と愛撫して鋭意前説と主張なし孤城と守りて動のざりしと或官人の聞及びて兩組の間と周旋し遂に五月廿四日久しく結んで解ざりし双方の紛議と解き二派合併の上諸事と談じ舊弊古習の風俗と改良して更に左の通りなる角艦營業内規則と撰定したりと云

明治十一年二月五日警視御本署甲第拾一號と以て相撲并びに行司取締規則御布達により東京府下相撲合併一ト組と相成候に付協議の上更に左之通り内規則相定め候事

第一條







春冬兩度大相撲興行之際其指益金精算之義は棧敷土間新棧敷小間々に至る迄取締年番に及び歩持年寄並びに願人差添兩大關とも出會の上差引精算可相立事 但し府下に於て修行相撲興行之際精算之義も本文同様たるべき事

第二條

春冬兩度大相撲興行之精算帖は願人へ寫し取相渡し可事

第三條

春冬兩度大相撲興行之願人及び差添人の義は歩持加入の順序と以て相定めべく其兩人之内願人になると差添人になるとは鬮引と以て定むべし且興行損益金の歩方物持物人員の責任たるべし最も益金有之節は多少と論せず其一割と願人並びに差添人へ可相渡事若損金有之節は願人差添人とも歩持一同割合と以て出金可致事

第四條

春冬大相撲こう行濟の上取締年番及び重立たる年寄并に兩大關出會の上勝負と検査し給金増減可致事 但し給金の増減に依り番附順席と至當公平に可相定事

第五條

新たに東京府下の角觥組合に入者は直ちに其力技の優劣と試験し一般協議の上至當の給金と定め公平の番附順席へ記載すべき事

第六條

新たに角觥年寄となる者は從來の年寄物人員之末席に記名すべき事最とも拾兩以上の者にて年寄となる者は末席より十人目に記名する事 但し横綱及び兩大關の者年寄となるるとき其組合の協議と以て定むべき事

第七條

他府縣下へ出稼之節は歩持年寄之給金七圓歩持外の年寄は給金五圓と相定め候事 但し關八州の外は右給金へ二圓と増加する事

第八條

他府縣下へ出稼之節は取締年番及び年寄兩大關立會之上番附と調製し出稼可致最とも出先に於て年寄の指圖と用ひず自儘勝手の義一切不相成萬一自己の勝手のみや慕り其場に居残り或ひは逃走等いたし候者於有之は錦京之上其筋へ御届破門可致事 但し兩大關と雖も自儘の所爲あるに於ては本文の通り可致事



(第九條第十條は緊要ならざるに付略之を)

第十一條

組合取締年番撰定の儀は營業人一般の投票と以て相定め可申事 但し取締年番撰定投票の節關取以下の者は其師匠へ委任致し候とも妨げなしとす

第十二條

取締年番の者と雖も私意と擅まゝにし壓抑不正の廉有之節は一般の協議と以て其取締年番と應し協議の上更に取締年番と撰定し其趣き警視御本署へ可届出事

明治十一年第五月廿四日

此内規則書と双方へ爲取替而して後改正組の相撲共と兩國組の相撲共の力量と試るみ更に改正の大番附と調製し漸次親睦の意と表しぬ其後高砂浦五郎は相撲年寄の人数と限るの議と起せしに大いに多數の賛成あり仍て新たに年寄となるを禁じ員數八十五名と以て定限となす是又相撲組の利益と云斯の如く高砂浦五郎が熱心相撲組の改良と努むるの精意に成じ有名の年寄玉垣伊勢の海等は萬事と舉て高砂に委託し又相撲取一同も深く高砂が義侠と慕し明治十六年一月年番取締の投票多數と占め今池東京相撲組の頭取とまで進爵たり弟子

にも又有名の力士なる高見山は東の小結に進み大達。一ノ矢は前頭中の屈指なり其他四十餘名は各自強壯活潑にして末頼母數ものぞもなりとぞ噫一介の農夫宿昔の志望茲に達して遂に今日の名譽と得たり古語に曰く精神一至何事か成ざらんと此一句と以て編者閣筆の實と塞ぐ目出度く

孤蝶園主假餘白て一言す本編高砂浦五郎が履歴未だ其全豹と掲るに至す猶明治十一年前後の事舉るに數條の功績あり他日續編の起稿と以て初て瓦章の完全と得可し看官請諒焉

四十八手 櫓太鼓音高砂 大尾 相撲古實



明治廿四年十月廿二日印刷  
明治廿四年十月廿二日出版

翻刻<sup>發行</sup>出版人

三好守雄

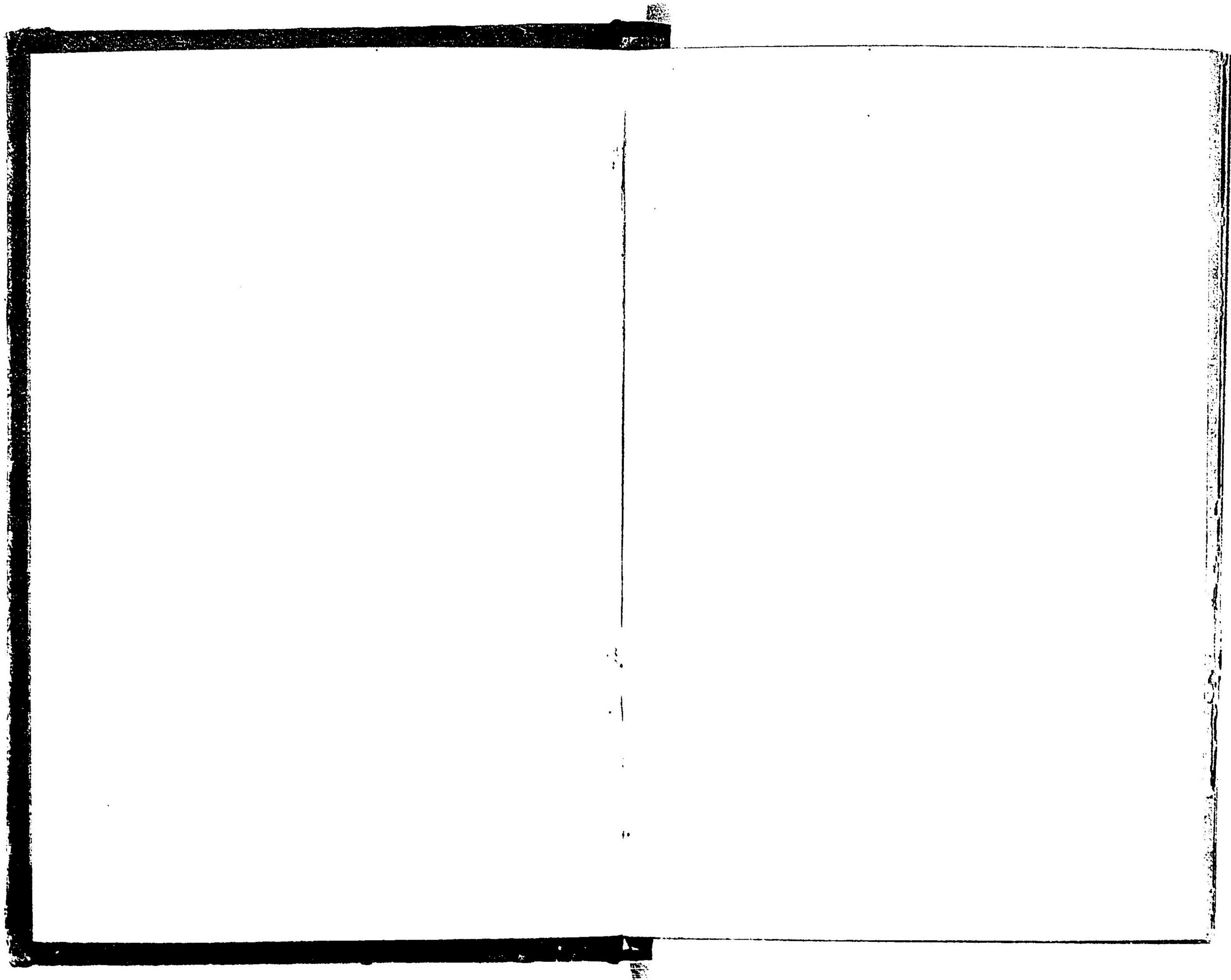
淺草區左衛門町  
壹番地

印刷人

松本秋齋

本縣區湯島壹丁  
目十番地







11  
5





091497-000-9

特11-15

稽太鼓音高砂 (四十八手相撲古実)

孤蝶園 若菜/編

M24

DBN-2466

